

「此方にお上んなさい。」

かう言つて、蝶次が立つて来た。

「何うか、あの、其處ではひどう御座いますから……」

客が上り端の狭い縁側に腰をかけやうとするのを見て、上さんも續いて立つて水で。

「い、え、此處で結構です。」

「其處ではひどう御座いますから……何うか、あの、其處よりも、まだ此處の方がいくらか宜しう御座いますから。」

かう勧めても、客は上らうともしないので、

「ちや、あの、これでも差上げませう。」

かう言つて、上さんは、花吳産を出して、その上に友禪メリンスの座蒲團を敷いた。そして烟草盆を出したり、團扇を出したりして、

「今日は暑う御座いますこと、急に夏になつたやうな氣が致します。」

蝶次のダイヤだの、客の金鎖だの、家の前の自動車とが上さんの目にチラ／＼する間に、客の眼には、長火鉢の上の縁喜棚と、大きな白い眼をした達磨と、ちよこなんと蝶次の膝の上に乗つた三毛猫と、三挺並べてかけてある長押の三味線とが映つてゐた。奥が見通しになつて、涼しい風が田圃から来た。

いつか蝶次は男の近くに座を占めてゐた。

「昔の通りね、姐さん！」

「もう少し何うかすると好いんですけど、田舎ではねえ……、本當に仕方がないんです」

「い、え、さうぢやないんですよ。ちつとも變らないと思つて。丸で、私が花子ツツて言つてゐる時分と少しも變らないんですもの。小さい私が其處にゐるやうな氣がするわ。」

男の方に話しかけるやうにして、

「三味線のかけてある處も昔の通りだし、縁喜棚だつてちつとも變つてやしないんですもの。其處んどこで。」

と、長火鉢の向うの處を指して、

「姐さんに勸進帳か何か致つて、覺えないツて、私も姐さんも一緒に泣いて了つたことがありましたわね。」

「さうでしたね。お前さんがまだ此位で。」

笑ひながら上さんはかう手を疊から三尺くらゐの高さに舉げて見せた。

#### 四十九

「まだ昨日のやうだけれども、もうおばアちゃんになりましたわねえ。早いものね。」

「花ちゃんなんぞ、そんなことはないけれど、これからなんだけれど……。私なぞ御覽な、こんなになつて、あくせく働いて、眞黒になつてるんぢやありませんか。田舎にゐては駄目だねえ。」

「そんなことはありませんよ。姐さん、若いわ、まだ……。」

「若いどころか。」

上さんは投げるやうに言つて、笑つて長烟管に烟草をつめた。

「花ちゃんが、あとで東京に行く時分、私も一緒に出て行つてゐれば好かつたんだね。さうすりや、やうか少しは物になつてゐたんだらうけれど……。」

「生中、東京に出て苦勞するより、かういふ靜かな田舎にゐる方がいくら氣が樂だか知れませんよ。東京に行つたつて、好ければ好いけれど、好い人ばかりはありませんからね。」

「それはさうともね。花ちゃんなんか幸福よ。」

鐵瓶の湯が沸いて來たので、上さんは、話しながら、九谷の急須を出して、それに茶を淹れて、茶椀に注いで、客の方へ勧めたりした。大きな鹽煎餅を山盛に盆に盛つて出した。

「これでも、この鹽煎餅はこの町の名物なんですよ。」

笑ひながらかう蝶次が勧めると、

「鹽煎餅の名物はめづらしいねえ。」

客は茶椀を手にながら、こんなことを言つてそれを眺めてゐた。

「抱へがいくたり？」

「いくたりツて？ 今ところは、一人ツきり、それにお酌が一人……」

「出てるの、皆な？」

「え、もう少しさつき……」

「よくそれでも出るわねえ。何ツて言ふの？ 名は？」

「お前さんの名だよ。」

「小園ツて言ふの？」

蝶次は笑つて、

「何代目小園？」

「さうね、三人目だと思つた……」

上さんも笑はずには居られなかつた。

「だって、花ちゃん、あの時ぐらゐ賣れたことはないんだもの。それは面白いやうに賣れたのは先づめづらしい方ねえ。」

「東京？」

「よし町に少しゐるたツて言ふだけけれど……。それに、花ちゃんの方にも少しゐるたツて言ふだけだ。」

「私の方に？ 何って言ってるたの？」

「才吉とか何とかか。」

「知らないわね……。出てきた姐さんの家が解ると知れるけれど。少し位るたんぢや、大勢だから知れないわねえ。」

ふと見ると、いつの間にか表の自動車の周囲には、大勢人ばかりがしてゐた。鼻涙を垂した子供だの、通りすがりの百姓だのが、わざ／＼近所から見に来た人達だのが何の彼のと言つて賑やかに騒いでゐた。中に、冷飯草履をはいた髪の白い一人の婆さんが、めづらしさうにその前に立つて見てゐた。

「お婆ちゃん、何うしたかと思つたら、あんなところにいるよ。」

かう言つて蝶次が立つて行つて、大きな聲で、

「お婆アちゃん！」

### 五十

老婆は冷飯草履をベタ／＼させて、靜かに此方へと遣つて來た。

「何て、まア、立派な車だんべい。獨りで動くんだつてなア。已ア、たまけちやツた！」  
こんなことを言つて其處に立つてゐたが、

「それにな、花ちゃんの立派になつたのにもたまけたよな。早い、馬車見たいな車がすうと來て其處で留つたから、はてなと思つたら、(已ア隣で政坊遊ばしてゐたんだがな) 綺麗なお上さんが其處から下りて來るぢやないかな。はてな！ 宅にそんな人が來る筈がないが不思議に思つてゐたよ。花ちゃんだなんて、何うしても解らなかつた。」

「お婆アちゃん、いつも達者ね……」

「達者なことは、お蔭で、ま、達者だがな、此頃ぢや、もう、何にも役に立たなくなつたよ。」

政坊のお守ぐらなるなもんだからな。いくぢがない……」

「それでも餘り變らないわねえ、おばアちゃん！」

「駄目だぞな、もう。」

かう言つて、格子戸の中に入つて來たが、其處に鶴田が腰を掛けてゐるのを見て、

「旦那さんですか、これは、まア、御免なさいまし。」

かう言つて、丁寧にお辭儀をした。鶴田の眼には、達者な利口さうな田舎の老婆が映つた。

「おばアちゃん、いくつになるの、それで？」

「元の處に來て坐りながら蝶次が訊いた。」

「六十六だがな。もう。」

「もう、さうなりますかね。」

「おばアちゃん、何か買つて來ると好かつたんだけど、急に來たもんだから、何にも買つて來なかつたから。」

かう言つてそれを手渡しやうとすると、

「飛んでもねえ、そんなこと。」

かう言つて、老婆はいきなり手を引込ませた。

「まア、そんなこと言はないで、ほんの少しばかりだから。」

蝶次が無理にそれを取らせやうとすると、

「さうかな、すまないな、それじゃ頂いて置くべいかな。」

初めの様子にも似ず、老婆はすぐ受取つて、烏渡頂く眞似をして、

「それぢや、旦那さん！ 遠慮なく頂いて置きますでな……」

かう鶴田へも挨拶した。

上さんと蝶次との話はまた盡きずに續いた。

圍はれた若旦那の話なども出た。

「此間も田崎の若旦那、宅の前を通つて行つたけがな。」

其處に腰をかけて話を聞いてゐた老婆は、傍からこんなことを言つた。  
ふと思ひ附いたやうに蝶次は言つた。

「おばアちゃん、自動車に乗せて貰つて上げませうか。」

「あの車にかな……」

老婆は表の自動車を見て、

「こわかんべい？」

「こわいことなんかちつともありやしないよ。」

「さうかな……。乗て見たいけれどもな。」

「私も乗せて頂きたいよ。花ちゃん！ 乗せて貰らへるの？」

却つて上さんの方が傍から乗氣になつて、

「自動車なんか、田舎では乗りたいたつて、乗られやしないもの。」

「ちや、皆なして、町を一廻りして來ませうか。」

かう言つて、蝶次は鶴田の方を向いて、

「い、わね、貴女？」

ちや

五十一

「い、とも……」

「貴方も一緒に入らつしやいな。」

「私はよす。」

鶴田は笑つて、

「私は此處で待つてる？」

「好いちやありませんか。」

「まあ……」

「ちや、三人して行きませう。」

蝶次は上さんの方を見て、

「兄さんは居るの？ 四人樂に乗れるから、兄さんも行けば好いわねえ。」

「待つて下さい。」

かう言つて上さんは奥に行つた。

暫くすると、姐さんのつれ合が奥から出て來た。髪を分けて、紬の縞の羽織を着て、莞爾してゐた。蝶次に挨拶して、續いて丁寧に鶴田に挨拶した。

「自動車に乗れるのはめづらしいですね……」

上さんは、

「この扮装で好いかしら。餘りひどくはないかね？」

「なアに、それで結構よ。停車場位まで行くのはすぐよ。」

で、四人は出かけた。老婆は後から冷飯草履を引摺つて行つた。蝶次は鳥渡小戻りして、

「ちや、待つて頂戴ね。」

「あ。」

鶴田は笑つて點頭いて見せた。

見ると、自動車の周囲には、益々人が多勢たかつてゐた。老婆が上さんと主人とに手を取られて、怖々ながら車に上つて行くのが見える。面白さうに上さんが笑つて居る傍では、主人が頭を掻きながら傍に顔を出してゐる男に何か話してゐるのが見える。一番最後に上つて行つた

蝶次は、ヴェールを首に捲いてすらりとした姿を此方に見せて、さも得意さうにして坐つてゐた。

「ぢや、好いわ。」

かう蝶次が言ふと、自動車は静かに動き出した。群集は驚いたやうに左右に路を開いた。暫く行くと、蝶次の水色のバラソルがサツと開いた。

兩側の人達は、皆な驚いたやうな顔をしてそれを見送つてゐた。藝者屋の菊本の主人と上さんと婆さんが乗つてゐるのが誰にも不思議さうに見えた。中には蝶次を知つてゐて、

「あれは、小園さんぢやないか……。何うもそうのやうだ。」

など、言つてゐるものなどもあつた。停車場は町から十町ほど隔つた處にあつた。それは蝶次が東京に往つたり來たりする時によく出入したなつかしい停車場である。遁けて東京に歸つた時には、其處から汽車に乗ると追

がかゝると思つて、わざ／＼もう一つ先の小さい停車場まで歩いて行つて乗つたことなどを蝶次は思ひ出してゐた。

「まア、小園さんだがな。」

停車場前の茶店では、到る處でかう聲をかけられた。停車場前の廣場で自動車を下りると、蝶次はそのまゝとある茶店へと入つて行つた。其處の上さんを蝶次は中でも一番よく知つてゐた。

「まア、小園さん。丸で變つちやつた！」

上さんは眼を丸くして立派になつた蝶次を見た。

「早いにも何にも、眼が廻るやうだ。」

菊本の上さんがこんなことを言ふと、老婆は、

「已ア、また、おつかなくつて眼を閉つてゐたよ。」



停車場前ていしやばまへに出る車夫くるまやなども、驚いたやうな顔かほをして蝶次てふじの居る茶店ちやんせの方はうへと近寄ちかよつて来た。中にはなつかしさうな笑顔えがほを此方こちに向けるものなどもあつた。田舎いなかは昔むかしも今いまも同じであつた。それは皆みんななその時分ときぶん蝶次てふじを車くるまに乗せた人達ひとたちだ。

田崎たざきの若旦那わかだんなを長いこと曳ひいてゐた吉五郎きちごろうといふのが居た。

「吉ちゃん、吉ちゃん。」

蝶次てふじはよくかう言いつて呼よんだ。いろいろな物を遣やつては、若旦那わかだんなを呼よ出して伴つれて来て貰もらつたことなどもあつた。その吉ちゃんきちちゃんがやがて遣やつて来た。

初めはじは痴愚のつぽのやうな顔かほをして、脊せの高い體からだを棒立ぼうだちに立たせて、いやに莞爾にこにこ笑わらつてゐたが、漸やく店の入口いりぐちのところへと近寄ちかよつて来て、

「小園さん、變かはつたな。」

「吉ちゃんだね。まア、久し振ながだね。」

蝶次てふじはすぐ其方そちに顔かほを向むけて、

「此頃このころは、停車場ていしやばに出でてるのかい？」

「不景氣ふけいきでな、仕方しかたが無いんだ。」

「若旦那わかだんなを此頃このころは曳ひいてないの？」

「曳ひくによ曳ひくが、此頃このころ、自轉車じてんしゃで夢中むちゆうだからな。」

「さう、自轉車じてんしゃなの。」

五十錢銀貨せんげんくわを一枚まい蝶次てふじが帶おびの間の財布さいふから出だしてやると、

「小園さん、すまないな！」

かう言いつて手てを出だして莞爾にこにこした。

「變りやないかえ？ 若旦那の許でも……」

「何にも變りやねえ……」

かう言つたが、急に思出したやうに、

「でもなア、お上さん氣の病か何かで、始中終くよくしてこまつてるにやゝあるよ。」

「何うしたの？ 遊ぶの？ 若旦那？」

「遊ぶにも遊ぶんだが、家の方もあんまり好くねえんだんべな。此頃ぢや、相場に手を出して大分損をしたッて言ふ話だぜ。」

「そんなことをしてゐるの？」

蝶次にはそれは初耳だつた。

其處から停車場のレールを横つて、野に出て行く道が見えてゐた。荷車が通つたり、土地の醫師らしい男を乗せた車が通つて行つたりした。それは田崎の家のある村の方へと行く路だ。

其路を半里ほど行くと、其處に川があつて、それは、町の中を流れてゐる同じ川の上流だが、それに沿つて、樫の高い垣で、四邊を取捲いた白壁造の土蔵がある。それがその田崎の若旦那の家だ。蝶次は流石に其時分のことを何彼と思ひ出してゐた……

自動車は此處でもその周圍にを集めてゐた。車夫は大勢傍に寄つて、何の彼のと言つて批評してゐた。停車場の助役らしい男も其處に来て立つて見てゐた。

「汽車とどつちが早かんべ。」

かうある車夫は運轉手に訊いた。

「旨いことをしやがつたな！」

吉五郎が此方に来ると、五十錢銀貨を蝶次から貰つたのを遠くから見つてゐた肥つた車夫は、かう言つて傍に行つて、

「半分奢れよ。」

「馬鹿を言へ。」

吉五郎はにや／＼してゐた。

蝶次の白いヴェールを中心にして、菊本の上さんの、老婆だの、その茶店の上さんのが、一かたまりになつて何か面白さうに話してゐるのが、暫しの間此方から見えてゐた。外では日影がキラキラする。

### 五十三

鶴田の待つて居る間もかなり長かつた。かれは退屈して、土間を通つて、裏の方に出て行つた。其處の六疊の間は、主人の室らしく、海舟の横額が長押にかかつて居たり、小形の法令大全が演藝畫報と一緒に机の上に乗つてゐたりした。鉢植の大輪の薔薇が見事に紅白に咲いてゐた。

その先はすぐ隣の島になつてゐて、そこから覗くと、矮鶏が二三羽ココと言つて餌をあさつてゐた。

「もう歸つて来さうなもんだな。」

かう思つたが、

「田舎の藝者屋なんて面白いものだ。ちつとも素人の町家と違ひやしない……。それに、もう何時だらう？」

金時計を出して見て、

「もう十二時だ。腹が減つたわけだ……。何處か、川に臨んだ鳥渡した料理屋があると言つたが……。」

其處に、遠くから音がして、自動車が歸つて来た。

「まア、お陰様で、めずらしい思ひを致しました。」

かう言つて、一番先に上さんが来て挨拶をした。

「早い、便利なもんですね。これで話の種になりました。」

主人は鶴田の前に立つて、叮嚀に禮を述べた。

最後に、後齒の下駄を引摺るやうにして蝶次が入つて来るのを鶴田は見て、

「何うするえ？ もう午だ？」

「さう？ もうそんなになるの。ぢや、川の縁に行きませう。」

上さんの方を見て、

「川の縁の方が好いわねえ、おいしいものも出来るわねえ。」

「え、え、川の縁の方が好う御座んすとも……。涼しくつて、それに、此頃、綺麗にしましたから。」

自動車でなしに、二人は一緒に町の裏道を歩いて其處に行くことにした。

「私の居た家も見て置いて下さいね。」

蝶次は笑ひながらかう鶴田に言った。

町は街道の昔の驛なので、裏町といふものは少しも發達してゐなかつた。通りから入ると、大抵すぐ畑になつてゐた。

前には、麥の半ば黄くなつた野が遠く展げられてゐた。桐の花の紫に咲いてゐる空地や、そら豆の見事に實つた畑などに沿つて、二人は細い道を並んで歩いて行つた。

「自動車がめづらしくつて仕方がないんですね。田舎ですね、失張……」

「でもおばアちゃんを乗せてやつてうれしかつた。」

蝶次は其時分のことを猶ほ飽かず話しながら歩いた。鳥渡とした路や、樹や、家屋などでもその非位を誘はないものはないやうに見えた。

「でもねえ、不思議ね、よく覚えてゐるのは、矢張、小さい時のことの方が多う御座んすね。後で来た時のことは、そんなではありませんけど……」

「でも、その圍はれた家のことは忘れられないと見えるね。」  
軽く男が突込むと、

「さうね、矢張、惚れてゐたんですからね。」

蝶次はわざとそんなことを言つて笑つて見せた。

外套の袖のかけで握つてゐた手は、更に一層堅く女の方から握りしめてゐた。  
二人は縫れるやうにして歩いて行つた。蝶次の水色のバラソルには、野の明るい日が漲るやうにさしてゐた。

不意に蝶次は言つた。

「其處の二階屋よ。私のゐた家は——」

## 五十四

「どれ？ それ？」

鶴田は頷て訊いた。

其處に、欄干を取廻した高い二階屋があつた。半ば明いた硝子障子には、深い梧桐の影が動いてゐた。

門の表札には、「吉田」としてある。疎いかなめ垣を透して、そら豆の畑と、桑の葉と、庭を小さく仕切つた建仁寺垣とが見えた。

蝶次は覗くやうにしてその前を通つて行つた。

「何ういふ人が住んでゐるんだらう。今は？」

「さつきお上さんに訊いたら、中學校の校長さんだつて言つたわ。」

「校長さん? : : :」

二人はまた振返つて見た。  
蝶次は歩きながら、

「ちつとも變らないわねえ。私のゐた時と同じですよ。そら、いつか話したでせう。若旦那の監督をしてるやうな人で、私に横戀慕するやうなことになつて困つたつて言ふことを : : :。その人が、私とお袋と二人でゐると、よく遣つて来て、尺八なんか吹いたもんですよ。尺八の上手な人でしたよ。聞いてゐると、體から引入れられて行くやうな : : :。それは上手でした。月の晩などに、あそこの二階でよく聞いたもんですよ : : :」

「その時だね? 旦那が来て、疑はれて困つたつていふ話は?」  
「え、。」

「その人は何うしたえ?」

「何うしましたかね。もうこの土地にはゐないさうですよ。裁判所の方に出た人で、四五年前に、東京に来てゐたつていふ話を聞いたけれど : : :」

「細君のあつた人?」

「え、あつた人ですとも。」

話はそれで切れて、二人はまた黙つて並んで歩いた : : :。と、不意に、日に光つた川がその前に展げた。先づ第一に目を驚かしたのは、水々しい若葉青葉の影をあたりに漲らせた對岸の大きな樺であつた。鐵橋の向ふには白帆が二つ三つ見えた。

「綺麗な樺の若葉だね。」

鶴田は思はず言つた。

「本當にいゝわねえ : : :。本當に、此處等に別莊を拵らへると好いわ : : :。其處等、その高い處あたり : : :」

「本當に好い。川が好いね。ロンドンのテムズ川の上流の方に行くと、かういふ處があるがね。それはもつと綺麗だけれどね。その鐵橋の具合などによく似た處があるよ。」

「一つ、本當にお造らへなさいよ。」

「うむ……」

鶴田は笑つてゐた。

二人は暫らく其處に立つて見てゐた。田舟に一杯漢を積んだ船が、棹につれて此方へ此方へと遣つて来た。對岸には、藪だの、草むらだの、芦原だのがあつた。深い、靜かな淵をたへてゐる處なども見えた。此方の岸では、砂の多い桑畑の中を通つて、だら／＼と一條の路が向うへと行つてゐた。やがて蝶次の水色のバラソルと、男のバナマの白い帽子とが、並んで其處を通つて、川の縁の方へと下りて行くのが桑畑の綠葉の中に見えかくれに見えてゐた。

### 五十五

蝶次は到るところで歓迎された。その川の縁の料理屋でも、上さんが飛んで出て来て、いろ／＼とお世辭を並べた。その前の小料理屋では、上さんと亭主とが手を空けて、並んで二人の其處に入つて行くのを見送つてゐた。

新築した二階の一間は、木口も好く、床柱も立派に疊も新しかつた。欄干のすぐ下は川で、日影を帯びた水の光は、長い庇にチラ／＼と反射した。

「これは好い！」

鶴田は欄干に凭りか、つて川を見下した。

蝶次も傍に来て立つた。

「私、嬉しかつた……」

「何故？」

「でも、本當に貴方とかうして此處に來やうとは思はなかつたんですもの。この二月までは、貴方ツていふ人がゐるツていふことも知らなかつたんですもの。縁ね。」

「それで、嬉しいのかえ？」

「え、。」

「それは好かつたね。」

「時々また來ませうね……。それからもつと遠くにも伴れて行つて下さい！」

男の心を惹かなければ止まないといふやうな眼色をして、

「私、小園ツて言つた時分、此處の上さん最辰にして呉れて、毎日のやうに此處に來たんですよ。この町では、他にもう一軒、扇芳亭ツて言ふのがありますけれど、まア、此處が一番大きいですからね……。鳥渡、まア、田舎では好い料理屋でせう？」

「川があつて……。それに、田舎々々してゐて好いね。」

突然に、蝶次は、

「捨てちやイヤよ！」

かう言つたと思ふと、嬉しさが胸にこみ上げて來たと言ふやうに、男の手を取つて、それに顔をびつたりと押當てた。熱い涙はやがて男の手の甲を濡した。久しく顔を上げやうともしなかつた蝶次の丸鬚は絶えず微かに揺れた。

顔を上げた時には、それでも艶やかな笑顔になつてゐた。眼は赤かつた。

「何をしたんだい、此人は。」

鶴田が笑ひながらやさしく言ふと、

「だつて、本當に嬉しかつたんですもの。」

「まア、好いよ。誰か來ると、可笑しいぢやないか。眼なんか赤くして……」



「さう？」

帯の間から鏡を出して、映して見て、

「さうね、赤くなつたわねえ。」

かう言つて、小さな紙を出して、顔を直した。

其處に、肥つた女中がトン／＼音をさせて階櫓を上つて来た。

「小園さんは来るんでせう？」

「え、さう申してやりましたら。」

女中は二人の方をじろ／＼見て、

「今、出てゐますさうですけれど、すぐもらへるさうですから。」

「成たけお早く、どうぞ。」

蝶次はかう言つて男の方を向いて、

「貴方、何を召上る？」

「何でも好いけれど——、田舎で出来るめづらしいもの、方が好い。」

「ぢや、私に任せるわねえ。」

鮎のあらひ、鰻、なます——さういふものゝ蝶次は注文した。で、女中が下りて行くと、

た男の立つてゐる欄干の方に行つて、

「三代目小園さんが来てよ。面白いでせう！」

### 五十六

「今日は……」

かう言つて、その三代目の小園は入つて来た。髪のぢやれた、反齒の、小づくりな女で、間の近い眉は、毛虫のやうな格好をしてゐる。

「今、鳥渡、宅に寄つて、姐さんからいろんなことを聞いて來ましたわ。」

早口で、何處か田舎訛のある、いやに癩走ツた聲だ。

鶴田の前にも、女の前にも、もう御膳がちやんと出てゐた。鶴田は床の間を横にして、柱に寄りかゝつて、川が見えるやうにして坐つてゐた。

「これでも藝者かしら……田舎ではこれでも藝者で通るのかしら。」

こんなことを思ひながら、鶴田は不思議さうに、いろ／＼其女の饒舌るのを見てゐた。聲を立て、笑ふ時には、額に小皺が寄つた。

「自動車で停車場へ行つたんですツてね。私も行きたかつた。」

酌をするのも忘れて、そんなことを言つてゐた。暫くしてから、蝶次が訊いた。

「お前さん、何處の姐さんの家にゐたの？」

「よし町？ ぢやないの？ あそこでは峰次姐さんの家にゐたわ。ほんの少しでしたけども、

三月ばかりゐてよ。姐さんにも逢つたことがあるわ。」

「私に？」

蝶次は考へるやうして、

「私に？ それはいつでせう？ 去年？」

「もう一昨年になるわよ。花の時分、假装行列をして、お花見をしたことがあつたわね。あの時ゐたわよ。」

「さう、あの時ゐたの？」

「それから、岸の家ツて言ふ待合があるでせう。あそこで、姐さんと一座したことがあつてよ。大勢の時で、桃千代さんだの、太郎さんだの居たわよ。」

「さうですかね。ちつとも覚えてゐない……」

かう言つて、急に話頭をかへて、

「賣れて？ 田舎の方が好いでせう？」

「い、え、仕方がないわよ。」

萎れた様子をして、

「田舎は御祝儀の方、駄目でせう。随分お座敷の敷をしたと思つても、いくらにもなつてゐやしないんですもの。五つ位したつて東京の二座敷にも當らないんですもの。」

「それはさうね……」

「それに姐さん、田舎は狭いでせう。東京ならどんなにでも出来る處を、見す見す遊がして、ふやうなことがよくあるわ。それに、口がうるさいわよ。」

「でも、體も氣も樂だから……」

「體が樂だつて、仕方がないわよ。」

蝶次は笑ひながら、

「それでも、此頃は町の人も遊びますか。」

「い、え、矢張、好いお客さんは、町の人よか、在の方だわ。」

「さうですかね、矢張……」

蝶次は昔のことを思ひ出してゐた。甚句やサノサをガチャ／＼弾いてさへるれば、それでつとまるお座敷のことなどを頭に浮べてゐた。

やがて銚子を替へに小園が下に下りて行つた後で、鶴田は、

「君も、えらい三代目を持つたもんだね。」

「本當ね。」

蝶次も笑ひながら顔を蹙めて見せた。

やがて婆さん藝者が来る。菊本のお酌が来る。料理屋の上さんも遣つて来る。席は段々賑かになつて行つた。

「貴方、細かいのを持つてゐて？」

かう蝶次が囁くと、鶴田は財布を出して女に渡した。

一々紙に祝儀をつゝんで、皆なの懐に入れて遣ると、

「何うも難有う御座います。」

一座は皆な丁寧に禮を述べた。蝶次は、最後に五圓札を一枚包んだのを、

「これはほんの少しですけど……お茶代ですから。」

と上さんの前に出した。

誰も皆なかうした立派な旦那を持つたのを羨まぬものはなかつた。

「小園さんがまア立身したもんだな……。大きな船の會社の若旦那さんださうだが、人の運つて言ふものは解らないもんだ。」

など、上さんは先刻も帳場で獨言を言つたが、かうして何も彼も立派になるところを見ると一層その感を深くしない譯に行かなかつた。上さんは、頭を壁につけて禮を述べた。

「何にも召上るものがなくなつて……」

かう言つて下りて行つたが、すぐまた上つて来て、

「お氣の毒ですけど、もう少し緩くりなすつて居て下さいまし。この次の汽車で、今日の新しいわが参りますから、何かおいしいものが出来ますから。」

上さんは手に六ツ折の一枚の寫眞を持つてゐた。

「まだ、かういふ寫眞が取つてありましたよ。覚えてゐるでせう、小園さん。」

かう言つて蝶次に渡した。

「まア……」

蝶次はめづらしい人にも逢つたやうに、すぐそれを手に取つたが、じつと見詰めたまゝ、暫しは手から離さうともしなかつた。

「まア、よく取つてありましたのね。あそこですわね。あそこのお稻荷さんか何かの境内ですね。」

かう言つて、もう一度見て、

「まア、何うでせう、私が——」

かう笑ひながら鶴田に渡した。

その寫眞には、小さなお宮と、ひねくれた松の幹と、田舎の若い人達の群と、五六人の土地の藝者とが映つてゐた。鶴田は、その中に蝶次が袂を取つて上を向いてツンとしてゐるのを見

ぐ見て取つた。

「イヤに済してゐるね。」

「本當ですわね。」

蝶次はその寫眞を再び手に取つて、黙つて、長い間眼をその上に落してゐた。いろ／＼などが思ひ出されるといふやうにも見えた。急に、

「これはお正月でしたわね。何の宴會でしたつけね……さう、く、町の若い息子さん達の新年宴會か何かでしたよ。私がじつとしてゐると、この隣にゐる米山さん……紙屋の息子さんよ。それが私を笑はせやうとして、いろんなことをするもんですから、それで、こんなに上を向いてすましたんですね……考へると可笑しい。」

かう言つて、上さんの方を見て、

「皆さん、もう奥さんがお出来になつたでせうね。」

「え、え、もう皆な……」

「米山さんなんか、可愛い坊ちゃんがあるわ。」

小園は傍から言つた。

### 五十八

山駕籠が二挺、大地獄から強羅の温泉の方へと下りて来た。女の乗つた方の駕籠には、いろくんな山の花と一緒に、男の桐の杖の駒下駄と女の緋珍の細い鼻緒のすがつた疊つきとが並べて結びつけられてあつた。晩鶯と郭公とが到る處の谷で鳴いてゐた。

遠くで水の流れる音がする。

大地獄では、女は氣味が悪るさうな表情をして、

「こんな處にゐたつてつまりませんから早く行きませうよ。」

とかう言つて其處に立つて居る男を幾度も促した。鶴田は憤氣の高く白く颯る谷間に下て、物好に溪の水を掬んで見たりした。

「此處まで来て御覽、丸で川が湯になつてゐるから。」

「怖いわ、もし破裂でもしたら何して？ 早く上つて入らつしやいよ。」

氣が氣でないやうに、蝶次は上から呼んだ。蝶次は輿夫のゐる傍から遠く離れやうとはしなかつた。

その癖、其處から少し来た高い高原では、わざわざ駕籠から下りて、其處に咲いてゐる撫子だの桔梗だの女郎花だのを探つた。

「綺麗ね。」

かう言つて先に行く男の駕籠の處に持つて行つて見せたりなどした。世の中の總てのことを忘れ果てたといふやうに——昔の邪氣な子供にかへつたといふやうに、衣の裾を高く端折つ

て、女ははしやいで歩いた。

「もう、乗つたら好いぢやないか。あとで疲勞れたつて言つたつて知らないよ。」

かう男から言はれても、蝶次は駕籠に乗らうともしなかつた。雲は白く谷間に沈んでゐた。其處からは阪になるから、乗らなくつては駄目だと言ふのを、

「い、わ、この位の阪下りられるわ。」

と言つて、先に立つて半ば下りかけて、餘り急なので、

「大變よ。すべるわ。貴方、鳥渡手を借して下さい！」

かう女はけた、ましいい聲を立てた。奥夫達は笑ひながら、蝶次の手を取つて駕籠に乗せて遣つた。

それから暫らくの間、急な阪が續いた。蝶次は綱につかまつたまま、前路になつて、先に行くと、奥夫の毛脛と、男のバナマ帽と、バノラマのやうに展けられた谷と山と村落とを眺めた。矢

張水の音が遠くでしてゐた。

昨夜、ホテルで、暮れて行く靜かな湖水を、裝飾の見事な西洋間に眺めながら、

「今度は、折角来たんだから、ゆつくり遊んで行かうぢやないか。十日位遊んで行つたつて好いだらう。」

かう鶴田が言つた。それを蝶次は思ひ出してゐた。この客が出来てから、蝶次は碌々お座敷にも出なかつた。行きたくないお茶屋や、一緒になりたくない藝者との一座は皆な斷つた。そして、いつも丸鬚などに結つてゐた。

「い、のね、蝶ちゃん。」

誰も皆なかう言つて羨んだ。

坂を下りると、今度は兩方に谷を見るやうな組道が續いた。雲は往つたり來たりしてゐた。ある山小屋では、樵夫が一生懸命に大きな樹を挽いてゐた。鋸の齒の動く度に、木屑がバラバ

ラと下に落ちた。

温泉場の湯気が白く谷間から上つてゐた。

拾玉

五十九

「これが外国までも行くんですね？」

蝶次がかう聞くと、並んで上甲板の角の處に立つてゐた鶴田は軽く頷いて見せた。港の波は碧く日に照されて、向うに褐色の長い丘が連つてゐた。

港の中には、ダルマ船や、荷足や、ランチや、ボートなどが織るやうに行つたり來たりしてゐた。

「外国に行くには三月も四月もかゝるんでせうね？」

「それはかゝるとも……。長い航海になると、半年も経たなければ、元出た港に歸つては來ら

れないよ。」

「さうですかね……。随分、舟に乗つてゐる人なんて退屈するものでせうね。毎日、毎日海ばかり見て？」

「でも、馴れると、さうでもないんだね。それに、退屈しないやうに、いろいろな設備がしてあるからね……。それに、船乗には、港に着くと言ふことが楽しみなんだね。面白いところがあつたらね。香港だとか、ボンベイだとか……。そら、いつかも話したらう？ 船乗が港に着くと、財布の底をはたいて了ふツていふ話を？」

「え、え。」

「港ツて言ふものは、それは面白いもんだよ。船乗でなくつても、乗客でも、船が港に近づいたと言ふと、それは嬉しいもんだからね。」

「さうでせうね。」



かう言つたが、

「私も行つて見たいわ。」

鶴田が船員と話をしたり、藤椅子に身を横へてシガーを燻らしたりする間、蝶次は彼方へ行つたり、此方へ来たりしてめづらしさうに甲板の上を歩いてゐた。二人は停車場から、車の幌を暑い日に照されながら、わざ／＼此處へと遣つて来た。鶴田は少し用事をも持つてゐた。

「船を見せて下さいよ。」

かう女は言つた。

埠頭に繁つてゐるのを見ると、船かと思はれないほど大きな汽船、見上げるやうな帆檣と煙突、ギイと音して絶えず荷物を陸から船に運んで行く大きな機械——楷梯を上る時、荷役の男が五六人並んで仕事をやめて蝶次の方を見てゐた。

一等船室の立派な裝飾や、静かに何處かで聞えてゐるピアノの音や、綺麗に一面に敷き詰め

てゐる絨氈や、大きな立派な鏡や、さういふものは、今までかういふものを知らない蝶次の目を惹くに十分であつた。

「船ツて、かういふものですかね。綺麗なものね。」

かう蝶次は幾度となく言つた。

食堂は綺麗になつてゐた。卓の真中には、赤い白い西洋花が一杯に置いてあつた。其處では若い船員が一人、静かに小説らしい本を見てゐたが、二人が入つて来るのを見ると、丁寧に挨拶して、向うに出て行つた。

「此船は明日の午前の出帆だから、もうすつかり支度が出来てるんだ。」  
かう男が話して聞かせた。

「さう？ 明日、立つんですかもう、此船は？」

蝶次はちよつと考へるやうにして、

「ぢや、もう明日の今頃は海の中ね。」

寢臺やら日用道具やらの揃てゐる船室の中を見た時には、蝶次は思はず男の手を握つた。  
「二人して行きたいわねえ！」

六十

旅館の別荘から海岸へ下りて行く路は初め疎らな松原の中を通つて、西洋人の一家族の來てゐる家の傍を掠めて、それから砂丘と砂丘との間をすつと海の方へと出て行つた。

海はキラ／＼と日に光つてゐた。

午後になると、海水衣を着て、浮袋を持つて、麥稈の大きな帽子をかぶつて、屹度その別荘の四ツ目垣の折戸のところから二人は出て來た二人は其處に來てからもつかれこれ一週間近くになる。二人は先づ海岸にある海水浴の小屋に行つて、其處に著物を脱いで、そして海に浸る

支度をした。時には、蝶次の浮袋につかまつて泳ぐのを男が笑つて立つて見てゐることなどもあれば、女が男の遠く泳いで行くのを心配さうに立つて見てゐることなどもある。

「貴方、遠くに行くのだけはおよしなさいよ。もしものことがあつたら大變ぢやないの？ 私貴方が遠くの方に泳いで行くのを見ると、いつもハラハラするわ。」

蝶次はそんなことを言つた。

「でも、此頃は少しは泳げるやうになつたわ。浮袋がなくなつても、もう大丈夫よ。」

ある日、蝶次は嬉しさうな顔をして言つた。

海岸にはいろ／＼な人が集つて來てゐた。女學生、細君、紳士——皆な平氣で面白さうにして海に入つて行つた。日に焼けて暑くなつてゐる砂の上に、海から出て來た身を腹這ひにさせてゐるお嬢さん達もあつた。ある若い夫婦は、海から出ると、少し離れた岩の蔭に行つて、並んでいつも海の方を見て居た。

一三日の間は、蝶次は絶えずさういふ人達の噂の種になつてゐた。男と並んで歩いてゐるといつも不思議さうな眼付で見送られた。

「何だらう？」

「それ者に相違ない。」

などと人々は噂し合つた。

「何うも、しかし、それにしては、海に入つて行く處が餘り見事すぎる。」

こんなことを言ふ人などもあつた。しかし、蝶次はさういふ人達とも段々懇意になつて行つた。

横山町あたりの問屋の娘だといふ二十三四の女と口を利き始めてから、大學教授の細君さいくんの海軍士官の細君さいくんなどとも段々話をするやうになつた。ある日、蝶次は長い間何處かに行つてゐたが、夕暮近くなつてから歸つて來て、

「面白かつたわ……。今ね、海軍の奥さんの許に行つて遊んで來たんですがね……。好い奥さんね……。御亭主ごていしゅさんは、中佐で、艦に乗つてゐるんです……。子供も舅姑しゅうこも何もないんだから、年中あゝして遊び廻つてゐるんです……。随分羨しいと思ふわ。それに、あの奥さん、三味線を弾くのよ。」

「三味線を？」

「え、三味線ばかりぢやない。いろんなものを持つて來てゐるわ。手風琴ハンドオルガンなどもあつたわ……。それで長唄ながうたなんか弾いて遊んぢやつた……。明日は一緒にいっしょに行つて見ませうよ。」

「何處どこにゐるんだえ？」

「向うの旅館りやうかんの離れで、六疊むつたまに二疊ふたたまの好いところよ。本當ほんたうに、あの奥さん好きになつちやつたわ。それに、私わたし、長唄ながうたなんか弾いて見せたもんだから、一度商賣しやうばいをしてた女位をんなぐらゐには思つたでせうよ、屹度きつと……」

蝶次はいろいろな話をじてきかせた。女にはさういふ細君の境遇がめづらしかった。

六十一

蝶次は海軍士官の細君の許に毎日のやうに出かけて行つた。その離れからは、大きな松の幹を隔て、碧い海が見えてゐた。

「本當に、あの奥さんのやうな身分になつたら好いでせうね。旦那さんが艦にゐる中は、あゝして暮してゐて、艦が横須賀なら横須賀、神戸なら神戸に日に着くつていふ電報が來ると、すぐ出かけて行くんです。そして旦那さんも都合で此處に來、三日も四日も泊つて行くこともあるんです。まだ若い人ですよ。四十二位でせう。軍服を着てうつした寫眞がチャント机の上に飾つて置いてあつたわ。」

さういふ話を何彼と男にして聞せた。

「それに好いちやありませんかね、倦きると、何處へでも別な處に行くんです。箱根とか葉山とか、京都とか……。だから、奥さん、いろんな處を知つてゐるわ。いろんなめづらしい話をして下さつたわ。」

「海軍にはさういふ氣の利いた細君がよくゐるもんだよ。海軍の人は何うしても開けてゐるからね。」

鶴田はその話を聞きながら蝶次に言つた。

餘り度々女に勧められるので、鶴田は一度一緒に其處に出かけて行つた。鶴田の眼にも、氣の利いた、瀟洒な靜かな生活が映つた。瘦削な、すらりとした細君は、派手な中形に黒縞子の帯なんかを緊めてゐた。

「それでも、他から御覽になるほどのんきでもありませんよ。一人ぼつちで、さびしくつて仕方がないことなどありますよ。」

細君は其時笑ひながら鶴田の方を見て言つた。その顔には何處かさびしい表情が現はれてゐた。

「子供がないと言ふことも、女に取つては、決して好いことではありませんね。」  
何かの話の中に、こんなことを言つた。嫁かない前に横濱の女學校に寄宿してゐた話などもした。

歸りには、二人は路のない松原の中をぬけて來た。夕日は海から松原にかけて明るい光を漲らしてゐた。それに向つて歩いて來る二人の顔は赤かつた。

不意に、蝶次は、  
「私なんか、本當に詰らない！」  
かう言つて足を留めた。

「何うして？」

蝶次の眼には早くも涙が滲み出して來てゐた。

「私なんか、いくら思つたつて、何うせ、何うにもなりやしないんですもの、何うせ、貴方の奥さんになれるんぢやなし……」

「また、そんなことを考へ始めたね。」

鶴田は女をなだめるやうにして、

「好いぢやないか、そんなこと、かうして一緒にゐれば好いぢやないか。」

「でも、私なんか詰らない！」

理由もなしに溢れて來る涙を何うすることも出来ないといふやうに、蝶次は兩手を顔に當て、そのまゝ、其處に蹲んで了つた。男は黙つて立つてゐた。これまでにちさういふ意味のない發作に、男は幾度となく邂逅してゐた。

「もう、お立ちよ……誰か向ふから人が來るよ。をかしいよ。」

鶴田は躊躇んでゐる蝶次の顔をのぞき込んで言つた。と、蝶次は一層堪らなくなつたといふやうに身を慄はせて泣いた。静かな松の音と波の音とがその周圍にあつた。

## 六十二

……母さんからも聞きました。直次姐さんからも聞きました。何も、僕は言ふことはない。僕い、唯、時の経つのを待つてゐるばかりです。

しかし時の経つといふことが、二人の間を元のやうに復活させる動機となるとは思つてゐない。始めから、僕はかうなること、知つてゐる。お前と僕とは是非さうならなければならぬ運命である。

しかし。このまゝでは別れられない。また別れたくない。是非一度逢つて、お前の心をも詳しく聞いて見たいと思ふ。僕がお前に盡してやつたこと、それから僕とお前との間が何うして

出来たか、何ういふ關係になつてゐたか、監獄にゐる清水は何うしたか、そんなことは、今更此處で言ふ必要はない、それほど僕は愚痴ッぼくはない。しかし、お前に逢つて話したいことは澤山ある。

此間は思ひもかけないやうなイヤな別れ方をした。あれから僕はかなり長い間煩悶した。お前のことが忘れられなくて何うしても仕方がなかつた。今でも矢張さうだ。僕は社に行つても仕事が見つからない。堪忍して頂戴ね。あの時から言つて、お前は涙をこぼした。あれは虚涙ではない。それを僕はちやんと知つてゐる。それは己にはさういふ世話は出来ない。巨萬の富を誇つてゐる人と、金の上での競争は出来ない。かう言つたら、お前は「さういふ譯ではないんです」と言つて泣いた。實際、それは金の問題ではあるまい。金の問題であるかも知れないけれど、何うも僕はさう解釋したくない。好いとも……お前さへさういふ心持でゐて呉れるなら、何んな立派な旦那が出来やうが、半年家を明けてるやうが、僕はかまはない。此の間

まさう言つたが、これが實際男の心だ。僕はお前に向つて無理なことを望みはしない。自由の體でなければ商賣が出来ないやうなお前の體から自由を奪はうとしやしない。しかし己だつて男だ。お前をすつかり自由にして自分のものにしたくないことはない。お前が他の男の爲めに丸鬚に結つたり、自動車で旅行したりするのを聞いては、餘り好い心持はしない……。お前はもう僕の體、僕の魂、僕の心の一部分になつてゐるのだ。それを突然引離して了はうといふのは辛いには極つてゐる。

僕には、やさしい手紙は書けない。お前の心を動かすことの出来るやうなそんな上手なことは書けない。しかし、僕の苦しんでゐるのは少しは察して呉れても好いと思ふ。僕は苦しい。僕の胸は張り裂けるやうに苦しい。金とか、旦那とか、さういふことでもないお前の心が——僕の魂の一部であつたお前の魂が、一分毎に一秒毎に、僕から離れて行くのが悲しいのだ。兎に角、一度、逢つて話しがしたい。そしてお前の本當の心も聞きたいし、この僕の心も話

したい……。どうか、明日でも電話をかけて呉れ——

六月十日

蝶子様

木川

六十三

……お前はとうとう電話をまかけずまた旅に出掛けて了つたね。あの翌々日行つて見ると、母さんが申譯のないやうな顔をして、獨りぼつねんと坐つてゐた。それを見ると、僕は怒ること何も出来なくなつて了つて、さびしく酒を飲んで歸つて來たよ。

「そんなことはないんでせうけれど、あの子は昔から我儘で、凝性で、すぐ夢中になつて了ふんですから……。何うせ長いことはないんですけれどもね。」かう母さん靴申譯のやうなことを言つた。

そして家の生計向のことも何も構はず夢中になつて出かけて行つて困つたなど、も言つて居た。

僕は何うして好いのか解らない。夜など一人である、お前のことが盡きずに思出されて来る、お前のやさしかつたことや、美しかつたことや、その折々につけてお前の言つたことや、さういふことが一つ／＼明かに僕の頭に蘇つて生きて来る。お前がなくなつては生きてもゐられないといふことが段々僕には解つて来た。もう僕は二三年すると四十だ、もう分別盛だ。それにも拘らず、僕は何うしてもお前を忘れることが出来ない。僕は昔の若い時分の心持に歸つて了つた。

此間、僕は何んな心持をして、お前の家を出たと思ふ。行く時には、今日こそ逢はう、今日こそお前の顔を見て、自分の思つてゐることも言ひ、お前の思つてゐることも聞かうと思つて行つた。望みを抱いて行つた。その望みは何の甲斐もなかつた。僕はさもしい心でお前の宅を

出た。もう十時だつた。星のない暗い闇の夜だつた。僕はじつとして立つてゐられないやうな心持ちになつて、傍にあつた櫻の幹に凭りかゝつた。頭には何を考へてゐるか自分にも解らない。唯言ふに言はれない悲痛が體を揺つて行つたのを覺えてゐるばかりだ。僕はさうしてその闇の中に十分や二十分は立つてゐたらうと思ふ。ふと氣が付くと、車が走つて来る、自動車の大きな目が向うから凄じい勢で光つて来る……。直次姐さんの家からは、切火の音がして、抱妓が出て来ようとしてゐる。僕は見付けられてはと思つて、慌て、そこを通り抜けた。

過ぎ去つた夢！ さういふ風なことが簇々と思ひ出されて来た。が、しかし、僕にはまだ過ぎ去つた夢とは思はれない。さう思つて僕は川の方へ歩いた。其處には川が流れてゐた。なつかしい、いろ／＼の追憶のあるその川だ。雪の降つた朝、小さな窓から望んだのもその川ではないか。いつも別れる、路の角に来て、お前は下に、僕は上に、「御機嫌よう！」と言葉を交はして別れて行つたのもその川ではないか。闇の晩に、お前と二人で土手の上を歩いてゐると、



川の真中の船に、火が赤く高く燃えてゐる。そして、艦の音につれて、その船は上流へ上流へと遡つてゐる。「御飯を炊いてゐるのね……。あれで、あの船の中に、夫婦も親子もゐるのね。陸じく暮してゐるのね。羨しいわねえ。」かうお前が言つたその川だ。

### 六十四

その川には同じやうに、對岸の町の灯がチラ／＼映つてゐた。水に臨んだ家の輪廓も闇の中にそれと指さされた。……僕の胸はいろんなことで一杯になつた。

「お前の心の何んな隅でも好い。何んな處でも好い。お前の心の中に、この自分を置いて貰ひさへすれば好いんだ！」其時、僕はかう思つて、ぼんやり川の岸に立つてゐた。うそではない其時、僕の頬を涙が流れた。

お前だつて、その涙は汲んで呉れるだらう。今になつて、お前がゐなくなつては生きてゐられ

ない體だといふことが本當に自分に解つて來たんだ。可哀相な男だとお前も思つて呉れ——。

何時、旅から歸つて來るか解らない。かう母さんが言つた。母さんもお前の宿所を知らないさうだ。しかし、僕はこの手紙を母さんに頼んで置いた。母さんが手紙を出す次手があつたら此の手紙も一緒に入れてヤツて呉れと頼んで置いた。何時何處でこの手紙がお前の手に届くだらう。海岸か、山の温泉場か、それともお前が旅から歸つて來た時か——

六月二十日

蝶様

木川

……僕は清水に逢はうとは思はない。しかし、僕は清水の噂にはいつも耳を傾けてゐる。清水は連累者がありはしないかといふ嫌疑を受けたので、裁判が中々難かしく、久しく未決監に入れられてゐるが、十日ほど前漸く決つて、前橋の監獄につれられて行つたといふことだ。こ

れから三年はそこで暮らすのだらう。

此間 縁日に行く、清水の細君が子供をつれてすぐ僕の前を歩いてゐた。僕はギツクリして足を留めた。濟まないが、僕には細君を慰める資格がない。寧ろ合はせる顔がないと言つた方が好い。細君の里はそんなに貧しくはないから、衣食に困るやうなことはないかも知れないが、苦勞で、面やつれがして、何處となくさびしい顔色をしてゐた。もう何も言はない。

七月十八日

蝶次様

木川

：明日は屹度逢ひに行く。是非一度逢はなければ気がすまない。何でも好い。お前が何んな顔をしてゐるやうが、何んな氣分であるやうが、そんなことは構はない、心を聞きたい、お前の

心

八月二十九日

木川

前後この四通の手紙が蝶次の手にあつた。六月二十日出の長い手紙は、蝶次が鶴田の鎌倉の別荘にゐる時に受取つた。女中が持つて来ると、傍で見えてゐた鶴田は、

「母さんから？ 長い手紙だね。」

と笑ひながら言つた。蝶次は其處では封を切らずに、獨りになつてから開いた。夕方、松原の中を散歩する時にも、袂から出して讀んだ。

六十五

鶴田は久しく來なかつた。もう秋になつてゐた。名高い草花を見に行く人達が日曜日などに

は、ぞろ／＼と土手の上を通つた。蝶次は鬘に結つてゐることが多かつた。碌々御座敷にも出なかつた。

「蝶ちゃん、引くの？」

顔を見ると、雪子や政次が訊いた。

稀にお茶屋に出かけて行くと、

「此頃はしみ／＼御無沙汰ね。ちつとは旦那さんのお顔も見せて下さいよ。あんまり藏つて置くと、黴が生えるから。」

などとお上さんや女中が言つた。

さういふ風に世間では思つてゐるのに引かへて、蝶次は此頃何處か引き立たないやうな格好をしてゐた。物思しさうな蒼白い顔を常に四邊に際立たせてゐた。

家では大抵黙つてゐた。母親と口を聞くことも滅多になかつた。

「また、持病が起つたね、お前。」

かう母親に言はれると、

「さう？ 眼色が變つて？」

「お前の持病はすぐ解るよ。眼がかうキウツと吊るし上つて、人が何か話しかけても、耳に入らないッていふ風だからね。」

「さう。」

「お前、此頃餘程、何うかしてるよ。先様だって、都合はあるし、さうお前の思つたやうに行きやしないよ。」

母親は蝶次の顔を見て、

「もう少し落附かなくつてはいけないよ。」

「あ、。」

いつもに似合はず蝶次は素直な口の聞き方をした。

「御座敷にも出なくつちや駄目だよ。いくら好いお客があつたツて、藝者が二月も三月も用事をつけて置いて、歸つて来ると、始終中髷に結つてゐるやうでは仕方がありやしない。」

「解つたよ。母さんにも苦勞をかけないやうにするよ。」

かう言つて、わざと元氣の好い顔色をして笑つて見せたが、見るがうちにその顔色は變つて行つて、やがてぐつたりと長火鉢に凭りかゝつたまゝ、また深い思ひに沈んで行つた。

「あゝあゝつまらない！ 藝者なんかは何故なつたんだらう？」

氣が附くと、蝶次はこんなことを言つてゐた。

「自分で勝手になつたんぢやないか。」

「母さんに言つてるんぢやないよ。」

先程の素直に似ず、今度は癢に觸つたと言ふやうな言ひ方をして、そのまゝ、縁側の方に立つ

て行つて了つた。小さな庭には秋海棠が見事に咲いてゐた。

今から二十分ほど前、蝶次は土手の角にある自動電話へと出かけて行つた。他に、電話を借りるところは澤山にあるが、大勢、人の聞いてゐるところでは話たくないやうな氣がしたので、それで、わざ／＼其處まで遣つて來たのであつた。で、其處に立つて、蝶次はハンドルを廻してゐると、向うには、夕日にかゝやいた川がキラ／＼と光つて、青く白いペンキ塗の小汽船が石油エンジンのけた、ましい音を立て、織るやうな船の往來の中を、下流の方へと下つて行くのが見えた。

## 六十六

「鶴田さんはいらつしやいますか。」

「貴方は？」

かう此方の名を聞いて、

「ちよつと待つて下さい。」

一度引込んで行つたが、暫くしてから、

「只今、お見えになりません。」

「お邸の方でせうか。」

「何うですかわかりません。」

かう言つて、管なく電話は切れた、あとにはガヤガヤと計算の音などが聞える。

居ながら、留守を使つたに相違ない。何故かしらぬが、蝶次には其時さう思はれた。と、厭な、不愉快な、腹立しい氣が體中をくわつとさせた。蝶次は暫く立つてゐた。今までにも電話をかけて留守のことは度々あつたが、調子が今日のやうなことはなかつた。今日のやうに管なく断られたことはなかつた。

「只今、お留守ですが。」

とか、

「ちよつとお出かけになりましたが。」

とか、いつもかう丁寧と言つた。大抵は、

「鳥渡待つて下さい。」

と取次ぎの者が引込んで行つて、暫くして、

「うむ、さうだ。」

「うむ、よしよし。」

などとなつかしい鶴田の聲が聞えるのが常だつた。

何うしやうか——。お邸の方にかけて見やうか。かう思つたが、その電話の番號は忘れてゐた。で、體を半ば前の方にこませて、蒼白く昂奮した顔を電話帳の上で落して、一枚々々へ

―ジを繰つてゐる蝶次の姿が、夕日のさし透つた電話室の中に明るく見えてゐた。  
蝶次は再びハンドルを廻した。

「もし、もし、貴方は鶴田さんのお邸ですか。」  
暫らくは通ぜずにいる。

やがて小間使らしいやさしい女の聲で、

「ハイ、左様で御座いますが……。旦那さまで御座いますか。あの、旦那さまは、今朝ほどお出ましになりました、まだお歸りになりませんが……。」  
少し途切れて、

「急な御用が御座いますなら、社の方へ御かけ下さいまし。」  
「それではまた。」

かう言つて、蝶次は電話を切つて了ふより他に仕方がなかつた。蝶次はまた厭な氣がした。

小間使達か、

「旦那さまの許に、藝者から電話がかかつて参りましたよ。」

とか何とか言つて評判して笑つてゐるさまが眼の前にありありと見えた。

蝶次はまだ他に一軒、電話をかけた聞いて見る處を知つてゐた。それは鶴田に使はれてゐる男で、これまでも旅行の時間の打合せなどをその人に頼んだことなどもある。その人に聞けば、鶴田の消息は大抵は知れる、けれど今日は何うしてかそこに電話をかける氣にならなかつた。で、蝶次は萎れて自働電話室から出て来た。

土手の角のところに、政次と梅太郎とが並んで立つて川の方を見てゐた。

「電話？」

「え、〇。」

蝶次も立留つた。

「何してるの？」

「お客を待つてるのよ。そら、向うから船が来るでせう。」

かう政次が言つた。

見ると、成程、藝者や帮間を載せた船が此方へ此方へと近寄りつゝあつた。蝶次は家の方へ歸つて行つた。

### 六十七

蝶次はつまらなさうな顔をして日を送つた。十九の時に着たとかいふ派手なネルの上に、お召の羽織なんかを引かけて、鬘の少し横になつたのを直さうともせず、ぼつねんとして坐つてゐることが多かつた。傍に寄つて来る三毛猫をも煩ささうに向うに投つて遣つた。秋雨が軒にさびしく降つてゐる日などもあつた。

夢のやうに過した月日が繰返して考へられた。山だの、谷だの、船だの、海だの——自分から夢中になつて、何も彼も忘れて、娘のやうな気分にかへつて、唯面白く遊んでゐたといふことが不思議に思はれた。

「あの旦那も、あゝ見えて、中々えらいんださうですからね……。ちき倦きる人なんですツてね。」

こんなことを誰か言つたこともあつた。確か交代次姐さんだつた。

「わる口を言つてるよ。」

其時は蝶次は、單にさう思つただけで、別にそれを心にも留めなかつた。それが此頃蝶次の胸に蘇つて來た。

それが——その蘇つて來たといふことが、蝶次には此上なくつらかつた。これまでも、さういふ眼に客に逢はされたことはないでもないが、その時には、いつもキユツとすまして、知

らん顔をして、誰か何か言つたら、

「商賣ですよ。」

と言つて平氣でゐた。電話などを決してかけには行かなかつた。十日も二十日も、その客とはもうとうに切れたやうな顔をしてお茶屋へも出かけて行つた。と、きまつて、客の方から折れて來た。

「少し旅行してたんだから。」

とか何とか言つて、却つて向うから忘れられぬといふやうにして通つて來た。

しかし今度は蝶次はさうしては居られなかつた。自分の心が——體がその男の方に忘れずに引寄せられてゐるのが蝶次自身にもわかつて來た。それに、此まま鶴田が來なくなるやうなことがあつては、自分の周圍に對しても、餘り自分が意氣地がないといふやうに思はれた。「もう、あのお客も來ないんだとサ。」

かう噂されるのもつらかつた。

蝶次は電話をそれから二三度かけて見た。矢張り留守だつた。何處か、何か、急に用事で出來て、旅行にでも行つたのではないかとも思つて見たが、それらしい様子もなかつた。注意して讀んでゐる新聞の雜報には、鶴田の消息がよく出てゐた。一度は鶴田が横濱に社用で出て行つたことなどが書いてあつた。

蝶次は男の名前で、本宅に宛て、手紙を書いた。それには返事がなかつた。今度は、鎌倉の別荘にゐる時分、懇意にした女中に宛て、中に、男にやる厚い手紙を封じて、そして出してやつた。二三日して、

「お手紙の趣承知仕りました。早速、本宅に知れないやうに、旦那さまにおんどけ申上げますから、御安心下さいまし……。旦那さまは此頃はおいそがしい御様子です。」  
といふ返事が來た。



最後にわかれたのは、鎌倉から歸つて来た時だった。その時は、蝶次も鶴田も遊びつかれて荒んだ元氣のない顔色をしてゐた。

「送つてやらうか。」

と言ふのを、

「私も宅の方が心配だから。」

かう言つて、新橋の停車場で、別れた。鶴田は迎へに来てゐた自動車で歸つて行つた。

## 六十八

自分で考へて見ても、鶴田に愛想をつかさされるやうなことをした覚えはなかつた。また喧嘩がましいことをしたこともなかつた。寧ろ、此方から機嫌を取るやうに、やうにとのみ心がけてゐた……ふと、

「木川の手紙を見られたんぢやないか？」

かう蝶次は思つて見た。しかし蝶次はすぐ思ひ返した。

「だつて、そんなで、氣をわるくするやうな人ぢやない！」

半日黙つて、話を鶴田がしかけても、碌々返事もなかつたことがあつたのを、蝶次は續いて思ひ出した。矢張、鎌倉の川莊だつた。海が松原の間から碧く見えてゐた。何故、あの時自分はあるに黙つてゐたのだらう。何を考へてあんなに不機嫌な顔をしてゐたのだらう。さうだ……。清水の細君のことを考へてゐた。何故か細君の顔が眼の前にちらついて仕方がなかつた。

「お前も中々神経が強いね。」

其時、鶴田はさう言つて蝶次の顔を見た。それが蝶次にはひどく氣に觸つた。

「私など何うせ駄目よ。」

とか何とか言つた。いつものやうに顔が青く眼が吊し上つてゐた。

海に、山に、楽しく遊んでゐる中に、いつにもなく氣心を見られて了つたのではないか、それで愛憎をつかさねたのではないか。かう思ふと、それらしいことが其處からも此處からも出て來た。氣味のわるいやうにじつと見てゐる鶴田の眼も見えた。

「私は馬鹿だねえ。」

だしぬけにこんなことを言つて母親を驚かした。

母親は始めはそんなことはないと言つて、頻りに蝶次を慰めてゐたが、それが取越苦勞ばかりではないといふことが此頃段々解つて來た。

「困つたねえ、何うしたんだらうねえ。」  
など、言つてゐた。

「だから、言はないことぢやない。いくら好いたつて、そんなに好いことばかり續くもんぢや

ないからつて、私はあれほど言ふだけけれど、お前は夢中で、解らないんだもの……。本當に  
しやうがありやしない。」

「こんな愚痴をも母親は段々滴すやうになつた。

「好いよ、ほうつてお置きよ。」

蝶次は蒼い顔をして言つた。

木川はそれでも時々遣つて來た。かれの眼には、いつも不機嫌な、つまらなさうな様子をしてゐる蝶次の顔が映つた。もう以前のやうなやさしいところはなく、何ぞと謂ふと、人の氣も  
知らないでといふ調子で、ブいと外へ出て行つて了つた。

「貴方の顔なんか見たくないわ。」

かういふ風が歴々とその態度に見えてゐた。

「草花でも見に行かうか。」

慰めるつもりで、木川が言つたりすると、

「草花なんぞ見たつてつまらないわ。貴方一人で行っていらつしやい。」

「一人ぢやつまらない。」

「私だつて詰らない。」

母親が取つて呉れる肴で、酒を少し飲んで、つまらなさうな顔をして、いつも木川は歸つて行つた。

月の末には、それでも、鶴出からきまつた金を送つて來た。

### 六十九

その身の周圍を思ひめぐらすやうな時がやがて蝶次に來た。分けから看板借に、看板借から自前になつた時のことを蝶次は翻つて考へてゐた。

「何うせ、望んだやうな人の細君にはなれないにきまつてゐる。藝者で身を立てるより他に仕方がない。自前になつたら、毎年一人づつは、抱妓をも置かう。そして將來は自分で樂が出来るやうにしやう。」

かう思つて、田舎から母親をも呼び寄せた。家をも借りた。眞剣になつて働くつもりでもゐた。蝶次は浮々と過て來た年月を頭に浮べた。

お茶屋にも、待合にも、此頃では減多に行つたことはなかつた。

「また用事だらう。あの妓も忘れ癖がついたから駄目だよ。」

上さんや女中達は、皆なかう言つて段々口を懸けてよこさなくなつた。

「自前になると、何うしても、さういふ風になるものだね……。一軒の姐さんになつたつて言ふんで、いくらか慢心するやうなところもあるんだね。」

こんな隆口を言ふ姐さん達もあつた。

分けでゐる時分、眞剣になつて埒（あ）いだ頃には、月々の玉帳にあがつた金額もなまやさしい額ではなかつた。いつも二百圓の上に出てゐた。檢番に出る毎月の玉高でも常に一二を争ふやうな地位に立つてゐた。何といふ變化だらう。此の頃では、一月に指で數へるほどしか御座敷をしない。

それに、何の彼（か）のと言つても、その時分はまだ夢中（むちゆう）だつた。腹が立つことがあれば、一緒にゐる朋輩（ともだち）に當り散らしたり、髮結（かみむす）さんに無理を言つたりして、それでまア氣も晴れた。姐（ねえ）さん達の無理も氣に留めないで笑つて通した。客（きやく）と、お茶屋（ちやや）さへ大事（だいじ）にすれば好いものと思つて過ぎて來た。

それにしても何んなに其頃（そのころ）は身軀（みかた）だつたらう。お茶屋（ちやや）から、お茶屋（ちやや）へ、待合（まちあひ）から待合（まちあひ）へ、忙しい月には、家で、御飯（ごはん）を喰（た）べるなどはない位である。それに其頃（そのころ）は何んな遅（おそ）いお座敷（ざしき）にも平氣（へいき）で進んで出かけて行つたものだ。かう思ふと、お金（かね）でもあると、何處（どこ）も構（かま）はず、芝居（しばい）

だの、活動（くつどう）だのに行つて、子供のやうになつて、一日（いちにち）のんきに遊（あそ）んで來た。家の心配（しんぱい）や苦勞（くろう）は夢（ゆめ）にも知らなかつた。

「何故（なぜ）、家（うち）なんか持（も）つたんだらう？」

かう、獨（ひとり）りで蝶次（てんじ）は言（い）つた。

併（し）し、今（いま）では、もう其時分（そのじぶん）の氣軽（きがる）な心持（こころもち）には何うしてもなれなかつた。それに、一軒（いっけん）の姐（ねえ）さんといふ腹（はら）もあつた。滅多（めった）なお座敷（ざしき）へ出て、折角（せっかく）築（き）上げた名前（なまへ）に泥（どろ）を塗（ぬ）るやうなことも出来なかつた。

直次（なほじ）姐（ねえ）さんの世話（せわ）で、箱屋（はこや）の衆（しゆう）どんの二階（にかい）を席（せき）にして、名高（なだか）い年取（としと）つた師匠（ししやう）が、隔日（かくじつ）に常盤（とこわ）津（つ）を教（し）へに來（き）てゐた。丁度（ちょうど）それが蝶次（てんじ）の家の向（むか）ひになつてゐるので、冴（さ）えた撥音（はらね）と振（ふ）るひつきたいやうな聲（こゑ）が常（つね）に手（て）に取るやうに聞（き）えて來た。それに教（し）はり來（き）る妓達（ひなた）も絶（た）えず其處（そこ）から出（で）たり、入（い）つたりしてゐた。で、蝶次（てんじ）も勸（すす）められて、その會員（くわいゐん）の一人（ひとり）になつた。蝶次（てんじ）は憂（うれ）ひを

忘れる爲めにと、久し振で三味線の撥を取つて見た。併しそれは効がなかつた。歌の文句や牙  
えた撥音は却つて蝶次にその舊歌を思ひ起させた。をりをり蝶次の蒼白い頬を涙が流れた。

七十

「昨夜、あの人に逢つたよ。」

雪子がかう政次に話した。

「誰れ？」

「そら、自動車で、よく蝶ちゃんの家に來た船の會社の人！」

「鶴川さん？」

「え、さう。」

雪子は聲の調子を高くして、

「私、吃驚してよ。さうと知らないから、平氣で御座敷に行くと、あの人がにこにこしてゐる  
ぢやないかね、お前さん、新橋の常香つていふ藝者と泊り込みか何かで來てるんぢやないか。」

「何處で？」

「梅花園で。」

「ぢや、此頃、もう、來なくなつたのね。蝶ちゃんの許は？」

「だから、私、くやしかつたから、酔ばらつた振りをして、皮肉を言つてやつたよ。貴方も随  
分浮氣ね、私、そんなんぢやないんだと思つたツて言つてやつたよ。本當に、此頃ぢや立派な  
お客さんの方が藝者よりうは手なんだから、うつかりしてられないわね。」

「蝶ちゃん、あの人には、随分大騒ぎをしたがね。」

「大騒ぎをしたどころぢやないんだよ。此頃でも、それでふさぎ切つてるんだよ。抱妓の二  
人や三人は屹度置いて貰へると思つてもゐたんだし、それに、惚れてもゐたんだから。」

「もう、丸で来ないの？」

「何うだか詳しいことは知らないけれど、来ないらしいよ。此間、蝶ちゃん、涙をこぼして、雪ちゃん、お前さんだから話すけれど、此頃ちやもう藝者なんてしてゐる氣はないよ。藝者なんて罪な商賣よ。何うせ碌なことはないよ……。何故だか知らないけど、此頃、しみんく素人の娘か何かのやうな氣になつちやつた。」なんて言つてたよ。だから、猶、變な、がしたのね。一座したお照姐さんがおよしよ、およしよッつて止めるんだもの……。それに、新橋の常香ッていふ奴、そら、お前さんも知つてるよ。そら、新聞の廣告などによく出る。それがまたイヤに澄して、藝者ちや私が一番容色が好いッていふやうな顔をしるんだらう。此頃、此頃で腹立ちばいからね。グツと癪に觸つたのね。随分痰呵を切つてやつた。こつちの土地ちや、藝者がお姫さまのやうにチントすましてゐるものゝぞありませんからねッと言つてやつた……。」

「常香、さう言へば知つてるよ、あれがあの人の子？」

「あればかりぢやないらしいよ。何でも他にも澤山あるらしいよ。よし町にも、赤坂にも。」

「さうかね。あんな立派な旦那さんらしい顔をしてゐて？」

「でも、屹度、びつくりしたよ。何も藝者を聘んで、さういふ眼に逢はうとは思はなかつたらうからねえ……。私を聘んだのは、私と蝶ちゃんと交情が好いのを知つてるもんだから、却つて見せつけてやらうッてな氣で聘んだのかも知れないよ……。けどもね、こんな話をするとなんた氣をもむから、蝶ちゃんには内所にしてお置きよ。」

「あ。」

二人は土手の角からこんなことを話しながら歩いて来て、坂を下りて、検番の前で別れた。

## 七十一

土手から裏通りの方へ歩いて行く途中で、

「蝶さん！」

かう聲を懸けられて蝶次は振返つた。見ると、それは増田といふ男の家に雇はれてゐた五十ばかりの婆さんで、急いで後から此方へと驅けて來た。呼吸を切らしながら。

「お久し振でしたことねえ？」

「お婆さん、まア随分お目に懸りませんでしたね。お達者で結構ね。」  
かう言つて、蝶次は婆さんの方を見て。

「今は？」

「暫く、芝の方に行つてをりまして、つひ、四五日前、また此方に来るやうになりましたもんですから……。え？ 今は、この向うの杉田といふ大きなお邸に御奉公に上つてをりますがね……。今、ちよつとお見かけすると、何うも、蝶さんに似てゐる。蝶さんに違ひないと思つた

ちよつとから、一生懸命に追かけて來たんです。」

「さうですか、まアよくねえ。」

蝶次が其處に立盡してゐるのを見て、

「そつちに行らつしやるんでせう。御一緒に参りませう。私も其處まで参りますから。」  
婆さんは先に立つて歩き出した。

蝶次は昨年の春頃から秋にかけて、その増田といふ男の家に度々訪ねて行つたことを思ひ出してゐた。男はこの婆さんと二人きりで、其處からある銀行に通つてゐた。

「とう／＼亡くなりましたね……。あの増田さんもの。」

突如に婆さんが言つた。

蝶次は自からの耳を疑ふやうに、

「え？ どなたが？」

「あの、もと居りました増田さんですが。」

「増田さん——が？」

蝶次は棒か何かで烈しく體を打たれたやうな氣がした。顔色も俄かに變つて來た。

「何うして、まア、増田さんが？」

「つひ、十日ほど前ですよ。たしか七日ですよ。あの方は元から、肺が餘り丈夫ではなかつたんですがね。この夏あたりから、ぶらぶらして、房州の方へ行つたり何かしてゐましたが、この秋、東京に歸つて來てから、ドツと悪くなつて、駿河臺の病院に入つてゐらつしやいましたかね。この間、聞きますと、とう／＼亡くなつたさうですよ。」

「まア。」

蝶次は何と言つて好いか解らなかつた。肺病といふ二字が一番先に、強く蝶次の胸を刺戟して來た。

「まアねえ。」

蝶次は溜息を吐くやうにして、再び言葉をかさねた。

「本當に、まだお若いのに、氣の毒ですねえ。お若い方のあの病氣で亡くなる位、いやなことは御座いませぬね。」

姿さんは靜かな調子で話しながら歩いた。

「それでもお婆さんは、亡くなる前にお目にかゝつたんですか。」

「私は、先月の五日に、ちよつと、病院の方にかゝりました。まだその頃は、そんなにおわるくはなかつたやうでした……。それは、もう、あの病氣ですから、ひどく瘦せて、見る影もなくなつてゐましたけれど、それでも、氣分は確かで、貴女のことなど話してゐましたが——」

「誰か國から出て來てをりましたか？」

「え、兄さんが來てゐらつしやいました。」



「お氣の毒ね。」

蝶次はかう言ふより他に仕方がなかつた。二人は暫し並んで黙つて歩いた。

「それでも、まア、貴女のことは何んなになつかがつてゐらしたでせう！」  
婆さんはやがて話しつゝけた。

「貴女のことなんか、それは、これッばかりもわる口など言ひはしませんよ。稼業をしてるんだから仕方がないツて言つてね。とても、私の力には及ばないんだからツてね、それは、貴方のことをなつかしがつてゐましたよ。私も、かうして人さまに使はれてゐる身でないと、ちよい／＼お見舞にも行かなけりやならないんですけど、行くつもりでもをりましたんですけれど丁度、其時分、芝で奉公してゐた家が忙しくつて、半日の暇も容易なことでは貰へなかつたもん

ですから……」

呼吸をついて、

「それにね、残念なことはね。蝶さん、その一番終ひに行つた時に、貴女の話をして、一日でも好いから逢ひたい、向うではそんなに思つてゐないでも、こつちではこれほど思つてゐるんだからツて、さう言ひますからね、私は、さうですとも、蝶さんだつて、決して貴方の心を知らないんぢやない。稼業をしてゐるから、仕方がないけれど、貴方の心を行つて話せば、それを汲取つて呉れないやうな、そんな薄情な人ではないからツてね、私が近い日に向うに行く川事があるから、さう言つて、作れて來て上げるやうにするツて、約束までして來たんですよ。そんなに早く亡くなるんだと知つたら、何んな用事をさしおいても、すぐに來て、お願ひするんでしたけれどねえ……」

「それはいつですの？」

「先月の初でしたよ。」

「急にわるくなつたんですね。」

「え、え、あ、いふ病氣は、いけなくなると、すぐださうですからね……。でもね蝶さん、その時、さう言つて私が約束すると、増田さん、喜びましてね一目逢つて、この心を話すことが出来れば、もう死んでもね、残り多いことがないツてね。それは喜んでるたんですよ。」

「私も知つてゐればねえ……。お世話にもなつたんですから。」

蝶次の胸にもこの時何處からともなく微かな悲哀が催して來た。涙も出て來た。

「でも、まア、さう思つて下さるのが、佛には何よりですよ。」

婆さんも催されて聲を曇らせて、

「それにしましてもねえ、彼處にゐましたのは、まだ昨日のやうですのにねえ。人間ツて解らないもんですねえ……。え、あれから増田さん、遊んだり、酒をあがつたりしたかつて言ふ

んですか？ え、え、それはあがりましたとも、よし町のわるい女にも引かゝつて、お金も随

分澤山取れたんでせう。それで、體の方もすつかりこわして了つたんですよ。」

「お墓は何處ですか、御存じですか？」

暫く黙つて歩いてから蝶次は訊いた。

「お墓ツて、別にこつちにはないのでせう。火葬にして、骨を田舎に持つて行つてお葬式をするといふやうに聞きましたから。」

二人は猶話しながら歩いた。桶屋の前では、親方が弟子を相手に、大きなたがを井戸側にはめてゐた。汚い黒い溝に添つては、木槿の紅く白く咲いてゐる。垣などもあつた。やがて二人はある四辻の處に來てわかれた。

一夜蝶次がお名差しである座敷に聘ばれて行くと、五六人の客の中に二三度一緒に遊びに来て、顔を知つてゐる増田の親友の三木といふ男が交つてゐた。

「少し、此頃、瘦せましたね。」

など、蝶次に言つた。

人々の騒ぐのを餘所に、二人して廊下に立つた時には、

「氣の毒なことをしたよ、増田も……」

「本當ですなあ……。此間、お婆さんに逢つて聞きました。」

「蝶ちゃんのことを、それは、なつかしがつてゐたんだが——」

蝶次はそれには返事をせずに、

「兄さんは、もうお國にお歸りになりましたか？」

「あ、もう、歸つた……」

かう言つたが三木は調子をかへて、

「あとで、少し話したいことがあるんだが……」

「私に？」

其處へ、踊りが始まると言つて、お酌が蝶次を呼びに来た。

蝶次が別室でその三木と相對して坐つたのは、かつぼれも濟んで、宴會ももうお終ひにならうとする頃であつた。女中は煙草盆をそこに運んで来た。

「實は、蝶ちゃんに遣つて呉れつて頼まれた遺品を家に預つてゐるもんだから——」

三木はかう言つて、その親しかつた友達の最後のことを話し出した。死ぬまで蝶次の名を口から絶たなかつたことや、深く深く蝶次のことを思ひ詰めてゐたといふことは、蝶次の此頃の感傷し易い心を動かさずには置かなかつた。

「呼吸を引取る日に、丁度好い鹽梅に私は病院に行つてゐました。其時は私と、兄さんと、他

に親類の女の人が一人ゐりました。終まで正氣で、もう餘り苦みもしなかつた……。貴女のことを話して是非近い中に一度逢ふからって言つたら、ニッコリ笑つて、點頭いたが、それが最期でした。」

三木は低い雪つた聲で話した。

談話は段々その時分のことにも及んで行つた。

「何うして、あんなに深く貴女のことを思ひ込んだんだか……。それまでにも遊んだことがない男でもなかつたんですが、何うも不思議です。貴女に捨てられては、もう生きてる効がないツて言つて、それは随分眞剣でしたから……。え？ さうです、自暴になつて酒を飲んだのがわるかつたんです。その爲め、一時に、急に、病氣が出て來たんですね。房州に行つてる頃にも、一度行つて見ましたがね、もう其頃は見違へるやうに瘦せて、骨と皮ばかりになつてゐましたよ……。私は、そんなに舊い友達でもないんですけど、學校時代から惡意にして仲の

好い従弟同士のやうにしてゐましたから、本當にがっかりして丁ひました。」

蝶次は顔をすこし低頭き加減にして黙つてそれを聞いてゐた。そしてをりをり涙に濕つた眼を上げて三木の方を見た。夜は靜かに更けてゐた。

向ふの庭の樹の間には、雪燈と下駄の音とが行つたり來たりしてゐた。やがて客の聲で、

「三木、三木は何處に行つた！」

といふ聲がした。

「ちや、遺品はその中届けますから。つまらんものですけど、あの男の始終中持つてゐたもんですから。」

かう言つて、三木は立つて下駄を突かけて、敷石傳ひに灯の見える方へと行つた。ひとりになつてから涙は蝶次の胸に漲つて來た。蝶次は長い間障子のかげに立盡してゐた。

蝶次はつとめて懸つて来る口を受けるやうにしてゐた。併し、何處となく體が大儀で、長い御座敷はとても満足につとめては居られなかつた。無理につとめてゐると、頭痛がしたり、戦慄が出たり、立ぐらみがしたりした。あるお座敷では、蝶次の顔が見る見る蒼くなつて行つた。

「何うかしたの？ 蝶次姐さん。」

隣に坐つてゐたお酌が、氣が附いて、かう言つた時にはもう遅かつた。一座した藝者達は、大騒をして、蝶次を隣の一間につれて行つて、其處で氷でひやしたり、葡萄酒を飲ませたりした。直次姐さんの膝にもたれて僅かに細く眼を明いた蝶次の顔は、明るい電燈の下に大理石のやうに蒼白く見えてゐた。

「お前さん、此頃、本當に弱くなつたね。」

かう姐さん達が、元氣のない蝶次の顔を見て言つた。

「私、本當に瘦せたね。」

家で、鏡を見ながら、しみぐこんなことを言つてゐることなどもあつた。頬かほつそりと瘦せて、眉と眉との間にもさびしい影が常に往つたり來つたりしてゐた。顔が見違へるやうに長く見えた。眼は一層敏捷に動いてゐた。

「もう少し氣を取直して、元氣を出さなくつちや仕方がないよ。」

母親がかう言ふと、

「私、そんなに元氣がなくなつて？ 自分ちやそんな氣ぢやないんだけれど。」

「矢張、まだくよくよしてるよ。」

「さうかしら。」

鏡を見て、

「眼がイヤに落窪んでギョロギョロしてるね。それに頬がこけてね。」

鏡には、兩方の頬を指で扱くやうにして、わざと眼をギョロりとさせた蝶次の顔が映つてゐた。いつも来る結さんは、

「何處か體がお悪いんぢやないかしら。何うも、姐さんの疔癩の起しやうがいつもと違つてるやうですよ。誰かに診て貰つた方が好くはありませんか。」

かう言つて、川向うに、懇意な上手な醫師がある話をした。

「母さんは、まだ私がそんなことを考へてゐると思つてるの？ 鶴田なんて、あんな人のことなんか、もう爪の垢ほども思つてやしないよ。」

何うかすると、癩走つた聲で、蝶次がこんなことを言つてゐるのが手に取るやうに隣近所に聞えた。

ある日の午後、木川がいつものやうに遣つて來ると、蝶次は、

「買つて來て下すつて？」

「あ、彼方此方探して買つて來たよ。これが一番好いさうだよ。大學でつかつてゐると同じださうだ。」

かう言つて、持つて來た舶來の生葡萄酒を二罎其處に出した。

「さうさう、これが好いのよ。わざわざ銀座まで行つたの？ 親切氣があるねえ。」

蝶次は嬉しさうに言つて、罎に張つてあるペーパーなどを見てゐた。

「何ツて言ふの、これ？ 英語？ フランス語？」

「フランス語だよ。ボルドウといふ處で出來るんだよ。出來た土地の名が書いてあるんだよ。」

「さう。」

蝶次は莞爾してゐた。

で、蝶次は朝夕に猪口に二三杯づゝその葡萄酒を飲用した。

### 七十五

蝶次の姿はある日川の渡頭のところに覚えてゐた。

晴れた秋の午前で常に似ず水は際立つて澄んでゐた。緩く斜に孕んだ帆は、静かな櫓の音と共に、幾艘ともなく上流へ上流へと溯つて行つた。見ると、此方から出て行つた一艘の渡舟は中折帽だの、印袴纏を着た男だの、友禪メリンスの前垂をした娘だのを乗せて、中流からもう餘程先の方に出て行つてゐたが、をりから通つて行く小蒸汽の波を受けて、高く低くあふられてゐるのが鮮やかに此方から見えた。

土手の櫻の葉は、さほど風もないのに、バラバラと散つてゐた。

渡船小屋からだらだらと下りて行く路の方に、やがて蝶次は歩いて行つた。銀杏返に、翡翠

の金釵を見せて、従編の派手なコートを着し、後齒の下駄を穿いてゐた。小刻に歩く度に、裾の袍の色が絶えずチラチラした。

雁木には、他の一艘の方の渡舟が既に繋がれてあつた。丁度、潮時なので、波がザブザブと雁木の上を流れた。蝶次はそこを渡るために、波の寄せて引いて行く間を待たなければならなかつた。杭につかまつて舟に乗らうとする時、波は高く寄せて來た。蝶次は危なく衣の裾を濡さうとした。

「危ない！」

かねて見知越しの船頭が、かう聲をかけた時には、蝶次はもう船の中の人であつた。

「足袋を濡したでせう？」

笑ひながら船頭が言ふと、

「大丈夫よ。」

かう言つて、蝶次は後の方を振り返つて見た。土地の藝者は、渡しをわたる度に、屹度、いくらかの祝儀を船頭にやることを例としてゐた。船頭は藝者の乗るのをよろこんでゐた。やがて人々が集つて来た。山桐の駒下駄を穿いた書生は、船に渡らうとして、足を滑らして袴の裾をしたゝか水に漏した。と、土地のものらしい男が、

「何うも、此處は足場がわるくつていかん、船頭さん、何うかならないもんかねえ。」

「此頃、馬鹿に此方の岸が深くなつて了つたもんだから。」

かう船頭は言つてゐた。

船はやがて出て行つた。蝶次は船尾の方に立て佇しうなつまらなさうな顔をしてゐた。すらりとしたさびしい後姿が澄んだ秋の水にはつきりと映つてゐた。

蝶次は、此頃、醫者の許へと通つて行つてゐた。それは髪結さんの教へて呉れた。内科では此處等で有名な醫者であつた。

「……さうですな……胃腸も悪う御座んすな……けども、まだ今の處ではよく解りませんからもう少し通つて御覽なさい。」

かうその年を取つたやさしい口の聞き方をする醫者は言つた。

「少し、貴女は神経が強すぎる！ もう少し呑氣になさい。」

三日目の診察の時には、醫者は笑ひながらこんなことを言つた。すぐ言葉をついで、

「病氣は自分で治すやうにしなけりやいけません。くよくよしちやいけませんよ。それが一番病氣にはわるいんですから……。寝汗が出るやうなことはありませんか。」

## 七十六

「少しは……」

「出ますか、ふむ……」



首を傾けて、

「それに、夜、寝られないで困るやうなことはありませんか？」

「さういふことは御座いませんけれど、怖い夢に魘されて、母に起されることはよく御座います。夜分もうとくくしてゐる方が多う御座います。」

「ふむ。」

醫者は租をぬがせて、背中をコツコツ叩いて見たりした。で、其日は薬を取替へると言つて黄色をした苦い水薬と飴色をした丸薬とを呉れた。

「さうですね、成たけお座敷などには出ない方が好う御座んすね。靜かに、落附いてるなければいけません。」

四日に行つた時には、醫者はさう言つて、種々病氣についての注意を與へて呉れた。

その醫者の家は、廊に通ふ土手の下になつてゐるやうなところにあつた。向うには、新しく

普請の出來た大きな建物が幾軒ともなく見えてゐた。土手の上には小さい物賣店がこた／＼と並んでゐた。

流行る醫者で、いつも患者が控所に大勢待つてゐた。公園の藝者なども來てゐた。頭髪を真中から分けた、色の生白い氣障な代診もあれば、血色の好い、肥つた眼の細い看護婦もゐた。蝶次が行くと、その代診はいつも萍爾して挨拶した。

半裸體の女の大きな油繪が其の控所の長押にかけてあつた。それに對して柔かい長い安樂椅子が一箇置かれてあつた。蝶次はいつも其處に腰をかけて、自分の番の來るのを待つた。

船の向う岸に近くなつて行く間、蝶次は醫者のことだの、木川のことだのを考へてゐた。

「さういふ醫者にか、つてゐるのも好いけれど、本當はもつとしつかりした醫者にか、つて見る方が間違ひがなくつて好いね、その中、大學に行つて診て貰ふやうにしやうぢやないか。僕が知つてゐる學士がゐるから、それに頼んで、しつかりした博士か何かに診て貰ふ方が好いよ。」

かう木川は眞面目な調子で言った。蝶次は、此頃になつてから、木川の親切を染々と身に覚えて来た。

「僕の出来るだけのことはするよ。僕はそんな薄情な男ぢやないよ……。何うかして、お前の幸福になるやうにと、そればかり考へてゐるんだよ。家を持つ時分から、さうばかり思つてゐたんだよ。」

素朴な、何も彼も言つて了ふやうな調子の中に、やさしい男らしい心が歴々と見えてゐた。昨日も、

「私がわるかつたんだから……」

かう言つて、男の胸に顔を當て、蝶次は歎歎けた。

「心配しないで大丈夫だよ。」

かう幾度となく木川の言つた言葉が力強く蝶次の頭の中に繰返されてゐた。

見ると、船はもう岸に近く來てゐた。新建の二階屋の硝子戸だの欄干だのが、明かにその影を水に落してゐた。潮につれて塵埃がたぶくと岸に打寄せられてゐた。

船を下りて、雁木の上を歩いて、通りに出ると、いつも乗りつけの年を取つた車夫が、莞爾しながら、逸早く車を此方へと曳き出して來て、

「今日は少しお早いやうですね。」

かう挨拶して、新しい前懸を蝶次の膝の上にかけた。

## 七十七

「何んて言ひました？」

「別に何とも……」

「だって、貴方は後に残つて何か聞いてゐるぢやないの？」

「何アに、あれは、いろく病氣についての注意を話して呉れたんだ……」

「肋膜がわるいッて言つたでせう。」

蝶次は神経の昂つたキとした眼色をして、木川の顔を見て言つた。

「イヤ……」

「話して下さいよ。私、何とも思ひやしませんから、肋膜なら、肋膜で好いから……。それなら、そのやうにしなければならぬから……」

「そんなことは言ひやしないよ。」

「ぢや、何ッて言つて？」

「海岸にでも行く方が好いッて言つたには言つたけれど……」

「それは、私にも言つたわ。」

「咽喉の方が少し悪いッて言つたには言つたけれど……さう大したことはないんだよ。」

「隠して置かないで、本當のことを言つて下さいよ、貴方。本當に、それならそれで、何うかしなければならぬんだから……。私にだッて解るわ。博士がかうやつて私の脊中から胸の方を見て、フムと言つた時の様子で大抵は解るわ。」

「さういふ風に、神経がつよいからいけないんだよ……。さういふ風に神経をつかつては、病んでなくつても病氣になつて了ふよ。」

「だッて、私だッて、それならそれと覺悟しなければならぬぢやないの？ 家に抱妓でも置いてあつて、私が寝てるても、稼いで呉れるなら好いけれど、稼ぎ手の私が寝てちや、今ぢや何うすることも出来ないぢやないの？」

「まア、心配せずにお置きよ。」

木川はわざと笑つて見せて。

「お前は一度さうだと信ずると、うそでも、何でも、さうしなければ置かない人だからね。」

「ぢや、うそなの？」

木川の顔を見てすぐあとを續いで、

「ぢや、何故、博士はあんなことを言つたんでせう？ 出来るなら、海岸に行つて、一二年静かにしてゐる方が好いなんて？ 肋膜でも肺病でもない人が、海岸に行つてゐる方が好いなんて、そんなことを言はれる筈がないわ……」

木川の黙つて歩いて行くのを見て、

「本當に話して下さいよ。後生だから。」

「まア、好いから、そんなに心配することはありやしないから……。他が見て行くぢやないか。」

インキ壺を下けてノートを持つた大學生が、此方を見ながら摩れ違つて通つて行つたが、五六間してから、また振返つて此方を見た。

木立の間から、赤煉瓦の洋館の窓などが見えてゐた。檻だの椎だのの大きな樹は、午近い日影を帯びて、濃淡の影を其處此處に落してゐたが、その向ふには、早くも紅葉し始めた楓が二三本明るく見えてゐた。二人はこの會話をする前に、ある洋館の廣い一間から、看護婦の行つたり來たりする長い廊下を通つて、受附の男だの小使だのゝゐる處を掠めて、そして戶外へと出て來た。

### 七十八

折角これまでに築き上げて來た生活もこれで全く徒勞に歸した。かう考へると、蝶次はじつとしてほゐられなかつた。

「私のやうな不仕合なものがあるだらうか。苦勞ばかりして來て、まア、これで好いと思へば今度は病氣にかゝつて……」

こんな愚痴を滴してゐる餘裕すらもなかつた。徐々としてしかも免るゝことが出来ずに前に迫つて來てゐる運命に對しては、蝶次は時には小羊のやうにもなり時には牝鹿のやうにもなつた。

「何うするんだらう、私は！」

かう言つて紙をビリ／＼と破つた。

「母さんは母さんで、田舎に行くなり何うするなりして下さいよ……。私？ 私は何うするツてきくの？ 私は死ぬばかりよ。ひとりで死ぬばかりよ。」

眼が鋭い光を放つてゐた。

眼に見ゆるものも、皆な今までは違つた感じを齎らして來た。暢氣さうに常磐津を教はりに來る若い妓を見ても、箱屋が姐さんに丁寧にあつちして行くのを見ても、新橋あたりの藝者と一緒に客が自動車に乗つて景氣よく通つて行くのを見ても、長押にかけてある三味線を見ても

香箱をつくつてゐる三毛猫を見ても、何を見ても彼を見ても心は屹度其處に行つて突當つた。そして自分で自分の身の行先を考へた。

櫻の葉は絶えずバラ／＼と散てゐた。秋の日影はぼつと障子に當つて、そしてそれがすぐかけつて行つて了つた。土手の角から望んだ川は常に碧く溶々として流れてゐた。青く白くペンキで塗つた小蒸気は、薄い煙を立て、そして通つて行つた。風は薄ら寒く肌に沁むるやうに吹いた。

時雨がサツと夜半に降つて通つて行つた。それがまた獨で床の中で眼をさましてゐる蝶次の胸に堪へ難い悲哀を誘つた。それに今まで氣にも留めなかつた川向うの時の鐘や、工場の汽笛や、納豆賣の聲や、夜深けて聞えて來る船頭の聲や、さういふものが自分にも不思議に思はれるほど強く明かに頭に響いて來た。そして、それと反對に、今まで絶えず問題になつてゐた姐さんの機嫌だの、朋輩の持つてゐるダイヤモンドの指環だの、客の細かい氣分だのからは、い

つか心が遠く遠く離れて行つてゐた。今までは、蝶次の身の周圍に、綺麗な賣れる抱妓だの、新しく建てた五間ぐらゐるの家屋だの、困つた妓の世話だの、皆なに憎まれた姉さんの調停だの、心から惚れた男だのが、絶えず纏はり附いて、何うかすると、その爲めに却つて自分の本心が全く蔽ひ包まれて了ふやうなことがないでもなかつた。——それが今は全く覺めた。あらゆるものを振り棄て、かい棄て、自分で自分の體に向はなければならぬ。それは丁度水霜にしをれて行く秋の草花のやうであつた。

「病氣になつた女などを、誰が——誰が世話して呉れやう。木川さんだつて、今は親切にして呉れるけれど……」

蝶次はそこまで押つめて考へて行つた。隣の下地子の黄い聲はいつも蝶次の窓の向うに聞えてゐた。

### 七十九

何んなことをしても——神佛に信心してもこの病氣を治さなければならぬといふ氣になるかと思ふと、それがすぐ消極的な、何うにもならないやうな沈んだ氣分に落ちて行つて、つまらなさうな顔をして蝶次は日を暮した。それに病院で死んだ増田のことが絶えず氣になつて、蒼白い眞面目なその顔が執念く頭に絡み附いた。

「貴女に捨てられては生効がない。」

いろ／＼な場合にいろ／＼な意味でかう言つた男の言葉が、今になつて却つてはつきりと新しい力を持つて蘇つて來た。

罪の深い稼業といふこともそれからそれへと思ひ廻された。今まで何うしてそれを考へなかつたかと自分ながら不思議に思はれる位であつた。男から男へと平氣で移つて行つた心持、金

から金へと暢氣に浮かれて行つた心持、それは丁度別の人が別な世界にゐて別なことをしてゐるやうなものであつた。蝶次は待合の間、藝者屋の二階、離れた旅館の間などに男に媚を呈してゐる自分を見た。心にもないことを言つて、いざといふ場合には巧にそれを外して行く自分を見た。

「もう、あのお客も駄目……」

かう見切をつけて、散々世話になつた男を振り返りもせず捨て、行く自分を見た。男が泣かぬばかりにして頼んで来るのを、平氣で、

「だつて困るわ、私だつて稼業ですもの。」

など、言つてゐる自分を見た。

「さうね、少し氣をつけてると、お客は何の位長く續くかと言ふことが解るものね。」

など、笑つて言つてゐる自分を見た。一人の客の財布から出た金をすぐ別な座敷の男に渡し

てゐる自分を見た——。ふと、氣が附くと、

「生効がない。」

といふ言葉が歴々と見える。

「それに違ひない。あの人から傳染つたに、違ひない。」

こんな考が、振棄て、も振棄て、も、絶えず蝶次の頭に上つて來た。蒼白い肌、軽い咳嗽、怨めしさうな顔……

「厭だ、厭だ。何うなつたつて好い、もう、私は……」

蝶次の顔は神経に顫へてゐた。

かと思ふと、何うかした場合に、お座敷から酒に酔つて元氣な顔をして歸つて來ることがある。

「お前、お酒を飲んではいけないつてあれほど言ふのに、解らないのかね、困るねえ。」

かう母親が泣くやうにして言ふと、

「大丈夫だよ、母さん、心配おしでないよ。病氣は氣で治さなけりやならないつて、お醫者さんも言つたよ。酒位飲んだつて大丈夫よ。」

まだ酔つてゐる蝶次は、お座敷着のまゝで、長火鉢の傍に坐つて、

「本當に心配おしでないよ。肋膜なんかもう何處かに行つちやつた……。母さん、後生だからお願いがあるんだよ。」

首を上げたり下げたりして、「後生だから、電話をかけて来て頂戴な。」

「何處にさ、お前？」

「何處につて、きまつてるよ、母さん、母さんも祭しがわるいよ。そんな祭しのわるい母さんぢやなかつたんだがね。」

笑つて見せて、

「社にかけるんだよ、木川にだよ。私も可哀相ぢやないか、男に不自由してるんだよ。」

長火鉢の側に兩腕を立て、兩手を顔に當て、こんなことを言つてるだが、急に歎歎ける聲が聞え出した。

「お前、何うしたのさ？」

母親が驚いて飛んで來たのにも構はず、蝶次は暫しの間涙に浸るやうにして歎歎をつゞけてゐた。

## 八十

ある日、電話口と呼ばれて出て行つた木川は、おどくどくと狼狽へた母親の聲を耳にした。

「何うか、あの、今日のお歸りには是非お寄り下さいまし、あれがね、大變にわるう御座いますね。」



「何うかしたんですか。」

「昨晚おそく歸つて来て、血など少し咯きましたり何かして……」

「それは何うも……。何か無理でもしたんですか？」

「え、昨夜、また例の通りお酒に酔つて参りましたね……。いくら申しても言ふことを聞かないんですから仕様が御座いませんですよ。それは騒ぎでしたんですよ。」

「ぢや、すぐ行きます。」

電話では詳しい話が出来ないので、木川は社の用事を抛つて急いで出かけた。格子戸を明けて座敷に入つて、第一に木川の眼に映つたのは、友禪メリンスの派手な襦袢の常つた掻卷の下に、枕を高くして寝てゐる蝶次の蒼白く昂奮した顔であつた。枕元には薬瓶だの茶碗だのを載せた黒塗の丸い盆が置いてあつて、それに午後の日影が明るくさしてゐた。

「何うした？」

かう言つて木川は蝶次の顔を覗き込んだ。蝶次は莞爾笑つて見せた。

「気分は何うだえ？」

「別に變りはないけれど……」

「醫者に診て貰つたらどう？」

「え。」

かう言つたが、無氣味な笑ひ方をして、

「血ツつてそれは紅いのよ。」

木川はそれには取合はずに、

「何しろ静かにしてゐなくてはいけない。少し位そんなことがあつたつて、心配することはありやしないから。」

買つて来た土産物を出して、

「二階無理をするからいけないんだよ。」

「でも、よく早く来て下すつてね……」

蝶次は嬉しさに、これで安心したといふやうに、晴れやかな顔をして見せた。

長火鉢の前では、母親は静かな震へるやうな聲で、成るべく蝶次に聞えないやうに話した。

昨夜歸つて来たのはそれは十一時過であつた。いつもより強く酔つてゐて、

「お母さん、今、お歸りだよ。」

など、元氣よく座敷に入つて来た。着物を着改させながら

「お前、また酔つて来たね、本當に駄目だよ。」

などと母親は言つてゐた。

「あれがね、此所のところ。」

と母親は小聲で座敷の襖のところを指して、何だか大儀さうにして、横になつてゐましたが

急に、母さん、何か出さうになつたから金盞を持って来て頂戴ツて貰ひますから、酒でももどすのかと思つて、急いで持つて行くと、カツと言つて略いたのが、紅い血ちや御座いませんか。私、吃驚して了ひましてね。一時は何うしやうかと思ひましたよ……。それに、病氣が病氣でせう。成たけ人に知らせたくないと思ひましてね。醫者を呼ぶにも心配をしましたよ。」  
木川は軽々、點頭きながら、母親の言ふことを黙つて聞いてゐた。

八十一

母親はくどくどと話した。かうなつてはもう商賣をさせて置く譯にも行かない。さうかと言つて、稼ぎ人が二月も三月も休んでゐて、それで立派に生活して行かれるやうな身分ぢやなし、それにあの病氣はお金のかゝる病氣だから——蝶次が小さな呼吸を立て、靜かに落附いてゐる間を見て、母親はさういふ細かいところまで話を持つて行つた。

木川は黙つて考へてゐたが、

「兎に角、一刻も早く海岸にでも遣つて療養させなくつちア仕方がないですね。」

「ぢや、何うしても一先づ家を畳まなければ——」

「残念だけれど、仕方がないですね。それに、治りさへすれば、何うにでも出来るんだから。一刻も早く海岸に行く方が好いですよ。ぐづぐづしてゐて、重くなつては、それこそ取りかへしがつかないから。」

「さうですね。」

母親は兩眼に涙を浮べてゐた。

木川は翻つて自分をも見、蝶次親子をも見、世間をも見、變つて行く人の一生をも見るといふやうな感傷し易い心持になつてゐた。かれは靜かにスヤスヤと寝てゐる蝶次の顔を見た——

Sangerin なんてこわいもんだよ、随分さういふ病氣にかゝつてゐながら、商賣してゐる女が澤

山あるツて言ふぢやないか——。かう言つた友達の言葉が歴々と頭に浮んで来た。

「あの女の病氣の血が俺の體にも流れてゐるんだ。俺があの女の爲めに死ぬのか、あの女が俺の爲めに死ぬのか、それは何方だか解らないが、兎に角、俺もあの女も早晚死ぬのは事實だ。」

こんなことが、ある小説の中に書いてあつたことも、續いて思ひ出してゐた。

庭の小さな枝の上に小鳥の飛んでゐるのが障子に映つて見えた。

「大丈夫だよ、僕は出来るだけは世話をするから。」

木川はかう言ひながら、一方では、さういふ境から免れて行く自分を見てゐた。此の自分がこの蝶次親子を捨て、了つたら何うだらう。誰が世話するだらう？ 悲惨な光景は忽ちこの二人を襲つて来るだらう、自分の愛した女（それは自分に總ての心を捧けたものでないにしても）その女のさういふ悲惨な光景に陥るのを自分は見てゐるに堪へられるだらうか。そればかりではなかつた。この病氣の爲めに、その愛した女がすつかり自分のものとなつた

といふこと、自分のものなどには到底することの出来なかつた女が、兎に角さういふ形のもとに自分のものになつたといふこと、が尠なからずかれの心を動かした。かれは再びスヤスヤと寝てゐる蝶次を見た。

かれは憐憫の情の新たに溢る、やうにその胸に漲つて来るのを感じた。

「兎に角、俺の出来るだけのことはしてやらう。わが愛するものとして、出来るだけの世話をしてやらう。」

かう思つたかれの眼の前には、海岸の小さな家屋だの、病院だの、松原だのが見えた。砂山を越えて海の方を見てゐる二人の姿なども見えた。室を別にして住んでゐるといふ病んだ二人の戀人の物語なども思ひ出された。

## 八十二

「蝶ちゃんは？」

かう言つて雪子が入つて来た。

「もう出かけました。」

「もう行つたの？」

簞笥を明けて片附物をしてゐる母親の傍に行つて、

「早いわねえ、何時の汽車？」

「何時ツて決つたこともないんだけど……あの人が早い方が好いッて言ふもんですから。」

「さう？」

失望したやうに長火鉢の傍に坐つて、

「これでも起きるとすぐ来たのよ。昨夜逢つたから好いけども……もう一度逢ひたかつたわねえ。もう當分歸つて来ないんだから。」

「あれも、逢ひたい人がまだ澤山あるけれど……なまじつか逢つて悲しい思ひをするのも厭だツてねえ。裏の方からそつと出て行きましたよ。」

「でも、家はあつたんですか？」

「え、昨夜雪ちやんが歸るとすぐ、あの人が來ましてね。丁度、病院の近くに好い家がありましたツて、四疊と三疊と六疊で、家賃もさう高くないんですツて……。四疊ツていふ間は厭ですけども、さう勝手も言つてゐられないから、向うに行つてから十分なことはすることに――一先づ其處に決めて來たツて言ふことでしたよ……。海が近くつて、それは好い處ですツて。あそこに行つてゐりや。藥を飲まなくつても病氣なんか治つて了ふツて言つてましたよ。あれもそれを聞くと、元氣が生まれてね。病氣なんか何處かに行つて了つたなんて言つて勇んで出て行きましたよ。」

「氣ですからねえ、あの病氣は――。海岸に行つて半年もおうとしてゐると、屹度治つて了ひ

ますよ。」

「さうだと好いんですけども……」

「心配することはないかも知れないよ、母さん。」

雪子はかう言葉を重ねて言つて、

「それで、母さんは何うするの？ 矢張、今日行くんですか。」

「今日行かれ、ば好いと思つてゐるんですけど、跡片附をして、送るものは送るもの、やうに、預けるものは預けるもの、やうにしなければりや行かれませんか。その運送屋の男を二人頼んだんですがね、まだ來ないから何うしたかと思つてゐた處ですよ。」

「ぢや、私、宅から使をやるわ。家のお秀も、役に立たなくつてもつかつて下さい。かう言つて、雪子は急いで出て行つたが、すぐ歸つて來て、

「いやねえ、別れるツて言ふものは――」

かう言つて溜息を吐いた。

母親は箆笥の片附をすまして、今度は縁喜棚だの佛壇だのの取片附に取りかゝつた。午前の日影が舞つた塵に線をなしてさしてゐた。

「母さんの來た時は嬉しかつたけど。」

雪子は指を折つて數へて見て、

「まだ十月と少しにしかならないわねえ。」

「去年の十一月ですからねえ。」

「解らないわね、母さん、人間といふものは——。蝶ちゃんだつて、一時は用事をつけて遊んでばかりた時もあつたのにねえ。私なども、何うなるか解りやしないわ。」

「雪ちゃんなんか大丈夫ですよ。」

八十三

「大丈夫だなんて言つてゐられないやうな氣がするわ。」

かう言つて雪子はまた溜息をついた。すぐ言葉を繼いで、

「それで母さんは、彼方に行きつきり？」

「何うしても行つてゐなければならぬと思ひますよ。一人ちや置けませんからね。あの人もちよいちよい來て呉れる譯にはなつてゐますけれど……社なんてよして了つても好いなんて言つてゐますけれど、さうも行きませんからね、これから、また、病人の看護ですよ。」

「母さんも大變ねえ。」

雪子は茶を自分でついで飲んで、

「それから借りた二階は？」

「私のゐる處？　もうちやんと約束が決つてゐるから、此方の方は何でもないんですよ。私も私のゐる處がなくなるのが厭だから借りたんですけど、こつちにはゐられやしませんよ。荷物を頼んでおくぐらゐるのもんですよ。」

「それはさうでせうね。」

其處へ頼んだ運送屋の男が二人遣つて来て、沿岸に近い停車場に送る家具の荷造を始めた。

箆笥だの、鏡臺だの、行李だの、衣具だのが日の當つた縁側に並べられた。

菰の切つたのや繩の丸めたのもあたりに散はつてゐた。

「勝手道具なんか向うで買ふと言つてゐるけれど、少しは持つて行かないと不自由するからねえ。」

母親はかう言つて、茶碗だの膳だのを衣具の中に懐れないやうに入れたりした。木川の友達のかいたといふ西洋畫の額なども丁寧に其處に入れられた。

出入の車屋からも、男衆が二人手傳ひに來た。その人達は、佛壇だの、長火鉢だの、もう一つの方の箆笥だの、大きな鏡臺だのを荷車に乗せて、其處から遠くない二階へと、運んで行つた。それは下で駄菓子などを賣つてゐる家で二階は日當りの好い、欄干のついた、小ざつぱりした六疊であつた。盆裁なども二つ三つ置いてあつた。

「誰れも運ぶやうな男きれがないから、次手に二階に上げて行つてお呉れよ。」

かう其處の婆さんに言はれて、男衆達は狭い狭い階梯を佛壇や長火鉢をかついで上つた。箆笥を一人の方が上げやうとして過つて階梯に添つた黄い壁に太い曲つた筋をつけると、

「こまるねえ、氣をつけてお呉れよ……」

かう婆さんは下から嘯鳴つた。

正午少し過ぎる頃には、それでも大抵は片附いて了つた。母親は着物を着改へて、看板のこゝとで檢番に行つたり、懇意にして呉れた姐さんの家に暇乞に行つたりした。

「さうですか、蝶ちゃんも行ったんですか。ちつとも知ませんでした……。まア、お名残が惜しう御座んすねえ。」

など、いふ聲が到る處で聞えた。

今日は麻布の従姉の處に行つて泊るつもりでゐた母親は、いろ／＼な用事をすましてから、最後にその駄菓子屋の二階に寄つて、男衆の運び放しにして置いた荷物を彼方此方と片附け始めた。もう一度箆筒を明けて、すつかり巾を改めて、そして錠をビンと下したりした。長火鉢の抽斗をあけると、その奥から何時入れて置いたか知れないやうな古い半紙に包まれた増田の寫眞が出て來た。

#### 八十四

その夜二人は病院に近い小さな旅館に泊つた。それは病院に見舞ひに來る客の泊るやうなと

ころで、鳥渡見では旅館とは思はれないやうな構であつた。低い柴垣があつたり、桔槔があつたり、小さな庭があつたりした。通りから見ると、松原の中に埋もれ果てて見えた。

蝶次は新に住む家に行つて見た。病院に入るよりも、病院の近い處に家を借りて、暢氣に住む方が好い。その方が氣が靜つて好い。かう蝶次も木川も思つた。停車場から二人が其處に來た時はもう日が暮れ近くなつてゐた。松原にさした夕日ももう薄くなつてゐた。

實直らしい百姓の上さんが、鍵を持つて行つて、勝手元の戸を明けて、そこから二人を内に導き入れた。木川は上さんに手傳つて、彼方此方の戸を残らず明けた。靜かな暢氣な新しい住居！ 蝶次はそれを好奇心を以て見ぬ譯には行かなかつた。

「好いわねえ！」

かう蝶次は嬉しさうにして言つた。

しかし蝶次に取つては、随分大きな生活の變化と言はなければならなかつた。三味線の音の



する座敷から静かな松原の中へ、明るい賑やかな町の雑闇から、病院に近いさびしい家へ、戀と歡樂との巷から遠く聞ゆる波の音の方へ……。蝶次は縁側の處に立つて、長い間松原の中に消えて行く夕日を眺めた。

「海も此處からすぐですわねえ？」

「そこからあの松の中を抜けて、向ふの砂山の上に行くと、すぐ見える。」

「病院は？」

「これを行くと、すぐだよ……。そら、松の中に、洋館が一つ見えるだらう。あれがさうだ。」

蝶次は黙つて其方を見た。

上さんは、松原の中の捷徑を取つて、二人をその旅館へと導いて行つた。

「左様で御座いますか。明日、お袋さんがお出でになる……。それでは、荷物の参るまで、そこにお泊りになつて入らつしやる方が宜しう御座います。小さい旅籠屋ですけども親切ですか。」

339

こんなことを話しながら、上さんは先に立つて歩いた。

旅館の入口の通りを傳つて行くと、其處に、病院の大きな門があつた。

「もう、今日は遅いから、明日行つて見ることにしやうぢやないか。」

木川がかう言つても、蝶次は何うしてもその前まで行つて見ると言つて聞かなかつた。

「鳥渡、門の處まで行つて見ませうよ。」

で、二人はステッキだの蝙蝠傘だのを旅館の女に渡して、そしてその方へと歩いて行つた。

日はもう暮れた。薄暮の光は言ふに言はれない静かさと思しさとさびしさを二人の周圍に漲らせた。松の音が静かに聞えてゐた。

松の途切れた處に、綺麗な砂利を布いた廣場があつて、その向ふに、病院の大きな門が半ば閉られてゐるのが見えた。二人は黙つて其處から引返した。

隣の間とは襖が一重隔つてゐるばかりで、洋燈の光がその隙間からチラチラ洩れて来た。若い男と女の聲とがしめやかに睦まじさうに聞えた。

「何ういふ人がかういふ處に泊つてゐるんでせうね。」

蝶次は襖の間から覗いて見たりした。

「机が置いてありますよ。それに、本立があつて、其の傍にランプが置いてあるのよ。女の顔が鳥渡見えるわ、色の白い、若い、女學生風の女……」

こんなことを小声で言つて、そしてもう一度覗いて見て居たが、座に戻つて、

「一夜泊りのお客ぢやないやうね。長く下宿してゐるやうね……。何でせう？ 夫婦でせうか。」

「病院に明いたところがなかつたりすると、かういふ處に下宿して、明くの待つてゐる人があつたら、さうだから、さういふ人だらうよ。屹度……」

「さうかも知れないわねえ。藥燻なんかも置いてあつたわ、机の上……」

兎に角四邊にあるものが蝶次には皆なめづらしかつた。かういふ處に生活してゐる人々の心持ちわからなかつた。

「これで旅館ね、面白い旅館ね。」

かう言つて、縁側から廁の方に行つて見たりした。

茶や菓子を持つて来た女は、女學生風の束髪に結つて、何うしても女中とは受取れないやうな風をしてゐた。白いリボンなどをかけてゐた。

「あ、いふのは、皆なお客に出るんぢやないかしら。」  
蝶次は蝶次らしい觀察をした。

「何にも魚がありませんで。」

その女はかう言つて膳とお櫃を運んで来て、そしてそのまま、引込んで行つて了つた。給仕をしやうともしなかつた。

「大變な女中ね。」

仕方なしに、蝶次はお櫃を傍に引寄せて、男の腕に飯を盛つた。

竹筒臺の三分のランプが暗く一間を照してゐた。二人は飯が済んでから、長い間いろ／＼な話をした。旅の話だの、後に残つた母親の話だの、今度住む家の話だの、姐さん方の話だの、それは容易に盡きやうともしなかつた。松の音と、遠くで打寄せる波の音と、それが話の絶間に聞えて來た。靜かに夜は更けた。

木川にはこの一夜が何とも言はれず樂しかつた。今までに、こんなに染々と心と心とが觸れたことはないと思はれるほどであつた。男は此頃女の心の益々自分の方に寄つて來るのを明か

に感じた。病氣になつてから、女は初めて男のものになつて來た。丸髻に結つて、素人と、しか思はれないやうなジミな扮装をして、かうして坐つてゐる處を見ると、何うしても女を憐れずには居られなかつた。

十時頃になつてから、女中は夜具を運んで來て、二つ並べて其處に敷いて行つた。二人は家庭に於ける夫妻のやうな心持で、別々に床に入つて、それからまた盡きない話を續けた。蝶次の大きく眼を明いた白い顔は、ランプの暗い影の中にいつまでも見えてゐた。

隣では女の小説を讀んでゐる聲が長い間聞えてゐたが、それが途切れると、今度は睦じさうな話聲がまたほそ／＼と聞えて來た。

## 八十六

前の百姓の上さんは、そのあくる日、肥つた、愛嬌のある中年の母親が東京から遣つて來た

のを見た。停車場からは、荷車二臺に載せられた荷物がやがて届けられて来た。

元氣の好い上さんは、いつでも新しい借手が入る時にするやうに、十九ぐらゐの娘と一緒に箒だの、掃摩だの、バケツだのを持って行つて、押入の中まで掃いたり拭いたりしてやつた。掃除する氣で、不斷着に着物を着改へて、母親が旅館から出かけて行つた時には、もう四邊はすつかり綺麗になつてゐた。娘は草ばうきで庭の隅の方を掃いてゐた。

「まア、お氣の毒でしたね。」

母親は田舎の人達の親切に感心したいとふやうな調子で繰返して禮を言つた。

取敢へすまアこれでお間に合はせなさいと言つて、角火鉢だの、茶道具だのをも借して呉れた。角火鉢には、鐵瓶がかかつて、いつでも茶が淹れられるやうに湯が湧いてゐた。

「え、え、此方は氣候が好いですから冬の最中でも霜なんか白く降るやうなことは滅多にありませんか……」

上さんはこんなことを母親に話して聞かせた。

それから少し経つて上さんが行つて見た時には、若い人達はもう旅館から此方に来てゐた。母親が薦包を解いてゐる傍で、蝶次は縁側に腰をかけて、暖かい小春の日影に身を浴させてゐた。男は母親を手傳つて、箆筒を持って遣つたりなどしてゐた。

派手な友禪メリンスの襟當の當つた搔卷の中からは、鏡が出たり、三味線の撥が出たり、茶道具が出たりした。

「暖かだわねえ、冬のやうぢやないわねえ。」

などと蝶次は言つてゐた。

上さんは娘に言つた。

「綺麗な人だねえ……。あんな人は見たことがない……」

娘は言つた。

「あの人が病氣なんでせうか？ 可哀相ねえ？」

次のやうな會話をもちた。

「御亭主さんにしちや、年がとりすぎてゐるねえ。」

「さうねえ、さう言へば何處か普通の夫婦でないやうな處があるね……。母さんは本當の母さんに違ひないけれど。」

「三味線などがあるから、普通の人ぢやアないかも知れないよ。」

かう言つて、上さんは考へるやうにして、

「可哀相だねえ、あの若さで。」

上さんはその持てゐる三軒の家屋で、いろ／＼な人達がその病氣のために斃れて行くのを見た。學校を出れば大した月給取になれるといふ若い男の死んだ枕元では、母親が聲を惜まらず慟哭した。懇意にした若い娘さんは、どつとわるくなつてから、病院に入つてやがて、西の死亡

室で亡くなつたが、死體を此處に運んで来て、其處で棺に入れた。入達はその白い顔を海岸にある草花で埋めた。そればかりではなかつた。其處にも此處にも、顔の蒼白い人々が歩いてゐた。そして、さういふ人々はいつか死んでゐなくなつてゐた。上さんはその持家が空くと、何より先にすぐ飛んで行つて、綺麗に掃除をした。そして藥壺だの痰壺だのを幾度となくごみ溜の中に入れて捨てた。

### 八十七

火曜日と金曜日には、東京から院長が遣つて來た。外來の患者を診察する室は、廣い明るい西洋間で、長い安樂椅子の置いてある壁には、基督の山上の祈禱のエツチングなどが懸けてあつた。大きな卓の周圍には、椅子が二三脚置かれてあつて、肥つて脂切つた院長は、いつも其處で莞爾しながら患者に對した。

で、別荘だの旅館だのにゐる人達は、皆なその日の時間を待つて、續々とその次の控室へと集つて來た。若い學生もあれば、良家の娘さんもある。子供を三人も家に置いて來たといふ中年の細君もある。鹿髪、結つた女學生もある。あんなに肥つてゐてそれでそんな病氣があるかと思はれるやうな老嬢もある。そして、さういふ人達は皆な松原の中の路で邂逅したり、海岸に行く砂山の上ですれ違つたり、波打際で話し合つたりする人達であつた。

「今朝はお寒いですね。」

など、挨拶し合ふ仲間であつた。

いつか蝶次もその夥伴になつてゐた。束髪に結つて、細君らしいジミな姿をして、口も注意して利くやうにしてゐても、それでも下町の意氣な處に住んでゐた人だといふことは誰にも解つた。始めは木川と一緒に來て、次ぎには母親が附添つて來たりした。院長も段々馴々しく口を開くやうになつた。

「お前のは、まだ、そんなにひどいのぢやないツて言ふから、まア安心した。」

其處から歸つて來た時、母親は着物を着改へながら言つた。

薬は運動がてら蝶次が一日おきに取りに行つた。初めは、表門の方からばかり行つたが、後には段々近道を感じて、松原の中をぬけて、旅館の裏の垣について、裏門の方から入つて行つた。薬を貰ふと、大抵はすぐ家に歸つて來たが、それでも、何うかすると病院の中の病室の方に行つて見たり、廣い運動場の方へ歩いて行つて見たりした。

運動場には、築山だの池だの海氣室だのがあつた。築山の上のベンチからは、大きい茶褐色の砂山を越して、鮮かな眼も覺めるやうな碧い海が覗かれた。漁師の地引網を引いてゐるのも見えた。日曜日には、入院患者の集つて祈禱をするといふ小さな會堂から、讚美歌の聲が悲しげに洩れて聞えた。

南向きの病室の長い廊下のはつれには、二三人の看護婦に伴はれて、もうかなり重さうな病

人が、暖かい日影に浴しながら、眩しいやうな眼色をして、遠い海を見てゐることなどもあつた。蝶次はさういふ光景に邂逅すと、さも自分の身の上上に危難でも落ちかゝて来たやうに、不愉快な厭な心持になつていつも急いで遁けて歸つて来た。

「母さん、退屈ぢやなくつて？」

何うかすると、蝶次は身を持餘したといふ風で、こんなことを言つた。母親が運動を勧めると、蝶次は言つた。

「だつて、ひとりで、ぼつ／＼歩いたつて、面白くも何ともありやしない。」  
でも、三味線の音は時々其處から洩れて聞えた。夜など遅くまで聞えてゐることなどもあつた。

## 八十八

何うした拍子か、ある日、母親は蝶次の稚ない時の話をした。六歳の時に死んだ兄、三歳の時に亡くなつた妹、酒と女で先祖の遺産を蕩盡して、その揚句に中年で世を早くした父親、其話は——これまでも度々聞たことがあるが、何うしてか、其日はそれが深く蝶次の心を動かした。他人のこのやうにのみ思つてゐた其話が、はつきり眼の前に浮んで来た。

「さうね、綺麗な着物を着て、何處かお父さんと一緒にお宮にお詣りに行つたのを覚えてゐるよ。」

「お前の生れた日はね。憲法發布の時かなんかで、雪が降つてゐて、お祭でそれは騒ぎだつたよ。まだ石町にゐた時分だから、二階に寝てると、表を手踊などが通つて行くのを、お前の祖母さんがね、「お貞、起きてのぞいて御覽！ それ通るから。」ツて言つたもんだよ。お前は容色好しだつて言つて、祖母さんが可愛がつて抱いたり何かしたもんだよ。」

かう言つて母親はその時分のことを何彼と話した。面白い節の俗謡が流行つたり、日本橋の

大通を圓太郎馬車が通つたり、五軒店に大きな蠟燭屋があつて、其處に姉妹の評判の娘がのたりした。その姉の方は母親の幼友達で、總領の兄の生れた時には、わざわざ祝物を持つて見に來た。それが身代が傾くと共に、姉も妹も皆な散々になつて了つた。ある時、新橋の停車場でふと見ると、其處に餘り綺麗でない身装をした中年の女がある。それがその妹の方の娘で、

「まアお貞さん。」

「まアお君さん！」

と言つたやうな譯で、それから段々姉の方のことを聞くと、随分苦勞して、後には吉原まで落ちて行つて、そして病氣になつて死んだといふ話し——さうした話が夫からそれへと盡きすに出た。

「でも、私達がかうなつたのは、父さんが悪いばかりではないのねえ……さうなつて行く運ね。」

蝶次は何かに感じた人のやうに染々した調子で言つた。

それから父親の話が出た。通人であつたといふ話し、小唄ものが上手であつたといふ話し、好物で人を助けることが好きであつたといふ話し——蝶次の眼には、濼い大島の重ねか何かを着て角帯をシヤンと緊めて、莞爾して店から出て行く父親の姿がありありと見えた。と、其處に、お烟草盆に結つた自分が、

「お父さん、お土産。」

とか何とか言つて送つて出て來た……。

蝶次の眼の前には、いろ／＼なものが通つて行つた。五軒店の人形、羽子板、其前に立つてじつと見てゐる小さい自分の姿、それから、蒼い海、波を截つて走つて行く汽船、レールの下のところになつてゐる小さな三間ぐらいの家屋、轟々毎日音を立て、通つて行く汽車——其頃は父親はもう自分を可愛がつて呉れるやさしい父親ではなかつた。父親と母親の喧嘩、その中



で幼い妹は生れて死んだ。蝶次は其時自分の持つてゐた可愛い人形を亡くしたやうに泣いた。

「絹ちゃん生きてゐればねえ。」

「さうすれば、どんなにお前の力になつたかしのれないよ。」

母子は盡きずに話した。

## 八十九

蝶次はやがて土曜日を待たざるやうになつた。金曜日の診察が済むと、

「明日は早く来て呉れ、ば好いね。」

かう言つて、東京から木川の来るのを待つた。

木川は土曜日から日曜日にかけて屹度遣つて来た。それは大抵午後の四時過ぎ上りの汽車の煙がぼつぼつと白く松原の中に消えて、鐵橋を渡る餘響が遠く遠雷のやうに轟き渡る頃であつ

た。その頃になると屹度、その家に面した、電信柱のある低いだらくとした坂を下て、急いで此方に歩いて来る木川の洋服姿が見えた。

坂の上から見ると、その家の高窓の障子は、いつも半分明いてゐた。蝶次が白い顔を此方に見せてゐること杯もあつた。

木川は屹度風呂敷包を左の小脇に抱へて、ステッキをついて、靜かにその坂を此方へと下りて来た。その風呂敷の中には病人の好きな菓子だの、新しい果物だのが入つてゐた。

「今度は榮太樓の玉だれを買つて来て下さいね。」

かう蝶次は自分の食ひたいものを頼んで遣ることなどもあつた。母親に頼まれて竹葉の饅頭なども買つて来た。

その坂を半分ほど男が下りた時は、蝶次がその家の入口から出て、島と島との間の細い道を通つて、此方へと迎へに出て来る時であつた。二人は、嬉しさうにして兩方から近寄つて行つ

た。

「今日は少し遅かつたのね。」

など、蝶次は笑顔を見せながら言った。

蝶次は男の手から風呂敷包を取って、

「買って来て下すつて?…: 好いのがあつて? さう? 嬉しいわ。」

坂を下り切らうとする處からは、松原を隔て、海が見えてゐた。それが、天氣の好い日には大抵夕日に輝いて、金屋のやうな閃きを美しく四邊に漲らせてゐた。海を隔て、遠い高い山も見えた。

しかし段々日脚が短くなつて行つた。後には、停車場から木川が其處に来る頃には、海も山も大方は暮れて了つて、暗紅色の夕照の中に、山が唯黒く見えてゐるばかりになつた。その家の高窓の明るい灯は、蝶次の代りに、そこから男を迎へてゐるやうに見えた。

「夕方は出ない方が好いよ…: それに、此頃は寒くなつたから、また咳嗽でも出るとわるいから。」

蝶次が外に出ようとする時、いつも母親はかう言つて引留めた。

長い間には、何うかすると、木川は土曜日には来ないで、日曜日の午頃になつて漸くやつてくることなどもあつた。さういふ時には、蝶次は機嫌のわるい顔をして、母親が口を聞いても碌々返事もしないといふ風であつた。

「だって、木川さんだつて、用があるから、さうお前の言ふやうにはかりもならないよ。」

こんなことを母親が言ふと、

「何も、私はそれを言てるんぢやないよ。私だつて、それ位のことには知つてるよ。」

かうは言ひながらも蝶次はつまらなさうに詫しさうにしてゐた。そして男の顔を見るや否や「人の氣も知らないで——」

かう言つて、悲しさうに歎けたりなどした。

九十

「もう貴方の親切はよく解つてるわ……。こんなに貴方に御世話にならうとは私は思はなかつた。これでもう十分ですよ。私はひとりで死にますから……」

「そんなことを言ふもんじゃないよ。」

「だつて、何うせ、私は死ななけりやならないんですもの……。死ぬなら、ひとりで死ぬ方が好い。世話になつた貴方にまで迷惑はかけたくない……」

「今日はまた何故そんなことを言ふんだえ？」

「何故つて言ふこともないけれど、つくづく私、考へたんですの、私が丈夫である中は、碌々貴方に盡したこともありもしないのに……。貴方は私にこんなにまで力になつて下さつた。こ

んなに嬉しいことはない。私、いつでもひとりでさう考へてるのよ。本當にすまないつて、いつでもさう思つてるのよ……。病氣でなければ、それこそ何んなに御恩返しも出来るんだけどそれももう出来ないし……」

「何うでも好いぢやないか、そんなこと。」

「でもね、私、考へると、恐ろしくなつて来るもの。私は、貴方に逢ひたいから、いつも土曜日に待つてゐますけれど、貴方のことを考へると、私はそんなことを言つてはをられない。」

「何故？」

「……………」

黙つてゐた蝶次は急に、

「貴方、もう私のことを思ひ切つて下さい！」

「何うして？」

「解つてるぢやないの？ 貴方はこれからいつ迄も長く生きてるなけりやならない人ぢやないの？」

男が黙つてゐると、

「ね、長く生きてゐて下さいよ。長く生きてゐて、私のことを忘れずに思ひ出して下さいよ。漲り出づる涙を蝶次は手巾で拭きながら、

「薄情な女だなんて思はずにね……。好いわねえ、本當にねえ、本當に、今ぢや、もう昔のやうな心持ちやるないんだから貴方のことばかり考へてゐるんだから……」

「ね、私のことは思ひ切つて下さいね。」

「……………」

「思切つて下さい！」

「何故、今日はそんなことを言ふんだえ？」

「思ひ切つて下さいよ、ね。貴方は長生して、いつまでもいつまでも長生してゐて下さいよ、ね。」

「誰か何か言つたのかえ？」

女はそれには頓着せずに、

「それやね、貴方に世話をして戴かなけりや私達は何うすることも出来ないんだから……世話はして頂くけれど……世話をして頂かなくては、ひとりでは私も死ねないだけけれど……」

蝶次の頬を涙がほろ／＼と傳つて落ちた。

「……私の、私の心は解るわねえ。」

「母さんが何か言つたのかえ？」

「さうぢやないんですよ。誰も何も言ひはしませんけれど。」

間を置いて、

「私だつて、貴方を思ふから、こんなことを言ふのよ。お願いですから、私を思つて下さるなら、いつ迄も長生して……」

蝶次の聲は再び曇つた。

九十一

「何故そんなことを言ふんだい？」

蝶次は今度は黙つて、溢れ出づる涙を手巾に押へた。低頭き勝になつた體は、歎歎ける度に顫へるやうに微かに動いた。

「餘りいろんなこと考へない方が好いよ。」

慰めるやうに男は言つて、低頭いた女の顔を傍から覗き込んだ。

蝶次は矢張悲しげに歎歎けてゐた。

午後の一間は静かであつた。松原を越した日影は、縁傍から障子にかけて、暖かい明るい光線を投げてゐた。母親は停車場近くまで買物に出かけて行つて留守であつた。で、その歎歎の音は暫しの間靜かに一間の中に聞えてゐた。

三味線、鏡臺、箏筒……それは皆な女の前半生を語つてゐた。男は一間の中を見廻しながら種々なことを考へずには居られなかつた。女を憐む心が俄かに湧くやうに起つて來た。

「本當に、もうそんなに考へない方が好いよ。」

肩の處に手をかけて揺つて、

「本當に體に觸るよ。」

かう言はれて女は顔を上げた。莞爾と笑つて見せた。が、すぐ悲しくなつたと言ふやうに、再び手巾で眼を押へた。男にも深い悲哀が心の底から湧いて來た。

「大丈夫だよ。誰が何と言つたつて、お前の傍を離れるやうなことはしないから。お前の病氣は治させずに置きはしないから……。本當だよ。此間もつくづくさう思つたよ。此頃ぢやもうお前のことばかり考へてゐるんだからね。お前もさうだらうが、僕もお前が生きてゐなくて生きてゐる効がないやうな氣がするんだからね……」

女の顔を覗き込んで、

「治さないでは置かないよ。お前の病氣が治らない位なら僕だつて生きてゐない。」

女の泣聲は俄かに高くなつた。

「でも……でも……貴方は。」

「解つてるよ。誰か何か言たんだらう。醫師か、でなけア母さんが……。それは知つてるよ。お前がさういふ心持も、母さんが喧しく言ふ心持も……」

「い、え、さうぢやないんです。母さんなんか何言つたつて構ひやしないんですけれども……」

「私、私……」

「お前が何うしたんだえ……」

「私、私からさう思つたんですから……。私はもう何うせ、ひとりで死なけりやならないんだから……」

「い、よ、もう解つたよ。そんな水臭い僕ぢやないから……」

「さうぢやないんですよ。」

自分の心がかうと先方に通じないかといふやうに、悟かしさうにして女はまた歎歎けた。海から風の來る度に女の鬢の毛が微かに動いた。

二人は長い間黙つてゐた。

母親が停車場から歸つて來る頃まで、二人はさうして坐つてゐた。で、母親が入つて來ると蝶次は泣いた痕の歴々と残つてゐる顔を見せまいと思つて、その儘立つて向うの方に行つた。

でも、母親はすぐそれを見て取つた。

「お前、また泣いたね。困るねえ！」  
など、言つてゐた。

## 九十二

「入院なさる方が好いですがね……何うも、家に居ると、不養生をしていけませんね。」

ある火曜日の診察の時に、院長は笑ひながらかう蝶次に言つた。

母親も前からそれに氣が附いてゐた。日曜日から水曜日にかけて、何うも體の様子が面白くなかつた。咳嗽が多く出たので、體温器の度數が急に高くなつたり、氣怠るさうに半日床に就いてゐたりした。で、土曜日の夜二人が八疊と六疊の襖を立て切つて、睦じさうに其方に入つて行くのを見ると、母親は娘の體を心配せずには居られなかつた。母親はその夜はあがり端の狭

い一間に蒲團を運んで行つて寝た。

八疊の間の灯はいつまでも明るくついてゐた。何うかすると、終夜消さずについてゐることさへあつた。二人は竹筒臺の古風な洋燈をその間に置いて、二つ床を並べて敷いて寝るのを例にしてゐた。女の枕元には、藥燻だの、痰臺だの、半分讀み懸けた本だのがゴタ／＼と四邊に散亂してゐた。

一眠りして母親の眼を覺す頃にも、その奥の話聲はまだ細々と聞えてゐることが多かつた。女の微かな笑ひ聲などもをりをり聞えた。

「まだ、起きてるの？」

心配になるので、母親が聲をかけると、

「まだ早いよ、母さん。」

「何時なんだえ、一體……」

「十一時が今打つたばかり。」

「それぢやもう早いこともないぢやないか。お休みよ。」

「あ、。」

かう言ひ乍らもその話聲は猶續いた。

「何うしてあんなになつたらう。彼方にゐる時分はあんなことはなかつたのに……丸で、此頃は素人のやうになつて了つたんだから。」

母親はこんなことを考へながら、涙へた眼を闇の中に大きく開いてゐた。

「明日、また熱が出たり何かして困るんだらう……さうかと言つて、もう子供ぢやなし、その位のこととは知つてるだらうから、さう喧しくも言はれないし……」

母親は一途に娘の體を案じた……と、話聲が急に止んで、洋燈がブツと消えた。

ある日、母親は、蝶次の寝てゐる床の傍に行つて、

「お前、お前は自分で自分の體の養生をするやうにしなくちやいけないよ……自分の體は自分で始末をするより外仕方がないんだから。」

蝶次は母親の顔から何物をか讀まうとするやうに、凝と見てゐたが、

「何故、そんなことを言ふの？」

「何故ツて……お前にだつてわかるだらうぢやないか……體が段々わるくなつて、取かへしにつかないやうになつたら、何うするんだえ。」

「大丈夫よ。」

「大丈夫ぢやないよ。後ぢやきまつて悪るいんだもの。」

「そんなことはないよ、母さん。」

蝶次はわざと笑つて見せた。

コクマク 蝶次

ママとママの



「だってお前、自分で自分のことは注意するやうにしくつては仕方がないよ。」  
 「大丈夫よ。」

「だって、院長さんもこの間入院する方が好いって言つたつて言ふぢやないか……。お前に治つて貰はなくつちや、母さん、何うも仕やうがないんだからね。それこそ路頭に迷はなくつちやならないんだから。」

「解つてゐてよ。」

「本當に、お前だつて、少しは母さんのことも考へて呉れなくつちや困るよ。お前にこれよりわるくでもなられちや——」  
 言ひかけたのを、

「母さん、澤山よ。」

かう蝶次は強く遮つて、

「母さんツていふ人は、少しも病人を取扱ふことを知らないのね……。そんなことを言つてる暇に、薬でも取つて来て頂戴よ！」

「お前はすぐさう痼癢を起すから仕方がないよ。親が子を思ふ情は、鳥や獸でも知つてるのに……。それがお前には解らないんだから、親の心持は解らないんだから……。」

「解つてると言ふのに……。」

「ぢや、さう素直に言つて呉れさへすれや、私だつて、安心してるけれど……。今のやうにズミく言はれると、ひ言ひたくないことまで言ふからね。」

話頭を改へて、

「薬を貰つて來るのかえ。」

「あ、。」

蝶次はかう言つて、搔卷をかけて仰向けに寝た。

母親は何かぶつく言ひながら、薬嚢を持つて茶の間の方に行つた。母親はこれから勝手元を済して、麥の青く芽を出し初めた畑の中の道をぬけて、旅館の傍を通つて、病院の薬局へと行かなければならなかつた。時を經るに従つて、母親は段々一通りでない看護の骨折を覺えて來た。牛乳も成たけ時間通りに飲ませてやらなければならず、魚類も新しい滋養になるやうなものを絶えず探して來て食せて遣らなければならず、毎朝起きない前に痰壺を綺麗に掃除して置いてやらなければならず、シーツも三日隔き位には洗濯してやらなければならず——それも段段病氣が快方に向うのなら好いが、此頃では、血こそ咯かないが、熱が出て、苦しうな眞赤な顔をして、續けざまに咳嗽などをしてゐることが多いので、後に廻つて脊中をさすつてやる母親は氣が氣でなく、何ぞと言つては、言はないでも好い愚痴がおのづと口の上るのであつた。

た。それは母親とて、木川と蝶次との間のことを知らぬではなかつた。

「あの方のお蔭で、まア、かうして保養もして行かれる。仇やおろかのことでない。」

かう思つて、常々感謝はしてゐるのである。しかし自分の肉身の一人残らず凋落して行くのを、言ふに言はれないさびしい心持を以て見て居る母親は愚痴も言はずに、じつとしては居られなかつた。

「どうしてかう私は不仕合だらう。」

と思つて、母親は蝶次の青白い顔をじつと見詰めた。

脂ぎつた肥つた手をして、井戸端で、隣の娘が菜などを洗つてゐると、

「肥つてゐらつしやることね……。羨しいやうですね。」

など、母親は言つた。

風のない暖かい日などには、二人は件れ立つて松原をぬけて行つた。碧海はやがて繪のやうに二人の前に展けて。

夏は海水浴で賑ふ場所も、此頃は漁師が一人二人波打際を歩いてゐるばかりで、都の人らしい姿は見當らなかつた。沖には大きな鐵色をした岩が、一つぼつねんと立つてゐて、その傍を斜に孕んだ帆が緩かに通つて行つた。

砂山の下に、海水浴の爲めに出来た小屋が一つあつた。そこに來て二人はいつも並んで腰を掛けた。腰掛が砂で汚れてゐた。蝶次が立つて躊躇してなごると、男は袂から手巾を出してそれを拂つてやつたりした。二人は別に何も話さなかつた。若い戀人のやうに、手を合はせながら、唯海を見てゐた。

どうかすると、こんな會話をすることもあつた。

「いつ見ても同じね、海は——」

「でも、綺麗ぢやないか。海に向うと、かう胸が開いて、十分に呼吸がつけるやうな氣がするぢやないか。」

「私は始終見てるせいかな、いつも同じで、退屈だわ……。よく、飽きずに波が寄せてゐると思ふわ。」

「でも、海の色は綺麗ぢやないか、今日は殊に碧い……。お納戸の濃いやうな色をしてるね。」

「この向うは海ばかりでせうか。國はないんでせうか。」

かうは言つたが、男の返事は耳にも入れずに、凝と遠いく海の方を眺めてゐた。かと思ふと、波打際を歩きながら、二人は東京の話などをした。

「早く、東京に歸りたい！」

蝶次はいつもさう言つて、男の方を見た。

「遊びにでも來てるんなら、それは好いけれど、居なくつちやならないと思ふと、飽き飽きするわ……。海と、波の音と、松原ばかりですものねえ。」

かう言ふと、男はきまつて此處の海岸の空氣の好いことや暖くなる頃まで保養してゐれば屹度よくなるといふことや、是非治つて貰はなければならぬといふことなどを眞面目な調子で話し出した。

二人は大抵波打際を行つて引返した。しかし、何うかすると、向うに見える漁師の家のあるあたりまで行つて見ることなどもないではなかつた。其處には、船が砂山の上に引上げられてあつたり、網が目に高くか、けて干してあつたりした。漁師が日向に坐つてせつせと、網の繕ろひをしてゐることなどもあつた。蘭の葉のやうな形をした植物が處々に青く簇生してゐた。

地引を曳いてゐるのを、始めは面白がつて見てゐても、却々それが終結にもなりさうにもないので、男がもう少しだから見て行かうといふのを聞かず。

「もう行つてよ、私。」

と言つて、蝶次は先へ歩き出した。男が後から追懸けて行くと、

「もつと見てゐらつしやいよ……。私、一人で歸るから。」

かう言つてスタク／＼先に立つて歩いた。

### 九十五

二人は海水浴の小屋に長い間黙つて腰を掛けてゐることなどもあつた。さういふ時には、二人がまださう深い間柄にならない前に、ある海岸に行つて、波打際を貝を拾つて歩いたところだの、松原から細い島道を通つて、眺望の好い山の頂上に登つて行つたことだの、その山の頂上

には小さな石のお宮があつて、其處から見渡した三面の海は丸でパノラマか何かのやうであつたことだの、其處から下りる時に、藪の中に蛇がゐて、女がけたましい聲を立て、蒼青な顔になつて了つたことだの、下の小學校では、丁度その時放課時間で、子供が女の先生を取巻いてワイ／＼騒いでゐたことだのを男はそれからそれへと思ひ出してゐた。

「あの頃は、まださう深くは思つてゐなかつた。好奇心と金とが自分にさういふ幕を打たせて見たに留つてゐた。何物にも捉へられないのを自分は自分の誇にしてゐた。それが、何うだらう？ 今のこの有様は——」

男がこんなことを考へてゐる間に、女は増田といふ男に惚れられてゐた時のことなどをそれとなく頭に浮べてゐた。

「さう思へば、あの時分から、何處か弱弱しい所があつた。よく咳嗽をしてゐた。」  
など、思つてゐた。かと思ふと、その考はすぐ現在の自分の身に移つて行つて、何うしても

突當らなければならぬ運命を前に望みながら、何うかしてそれを避けなければならぬといふやうな淋しい悲しいイラ／＼するやうな氣分になつてゐた。母親がそのことを言つた次の日曜日にも、二人は矢張此所に来て、長い間黙つて腰を掛けてゐたが、蝶次はそのことで胸が一杯になつてをりながら、一言もそれを口から出さなかつた。

「思ひ切つて下さい！」

と言つたのは、實はその反對で、

「何うしても思切られない。貴方は私と一緒に死んで下さい！」

と言ふことであるといふことが段々女にも解つて來た。

「思ひ切つて下さい！」

と言つた時、男はそれを眞に受けて、此處から姿を隠して了つたら何うだらう？ 最後の唯一の希望、最後の唯一の快樂、それさへ亡くなつて了つたら何うだらう？ 女はふと、

「何うせ、私に獨りで死ぬんだから、貴方は長生して、何時までも私のことを思ひ出して下さい。」

と言つた言葉を思ひ出して、そしてソツと涙の溢れ出るのを拭いた。

「私と一緒に……ね……私と一緒に。」

かう言つて、しつかり抱き緊めた心は、それは互にその時だけで、一度離れ、ば、心もそれと共に離れて行くものであることを女は染々と経験した。そしていつも深い孤獨の谷底に陥ちて行つた。

「好いよ、母さん、そんなこと心配しないでも……私だつて、ひとりではゐられないもの。ひとりでは……」

かう言つた心の底には、

「一緒にね……私と一緒に。」

と言つた心持が歴々と動いてゐた。

「熱なんか出たつて構はない！」

かういふ心と、

「本常に何うしたら好いんだらう。」

といふ心とが、いつも絡み合ひ纏はり合つて、そしてそこに凄じい心の波を揚げてゐた。しかし大抵は、

「構はない……何うなつたつて構はない！」

かういふ捨てた心持になつて、いつも熱い女の心を男の體に寄せかけて行つた……。二人は長い間黙つて海の方を見てゐた。波は凄じい勢で押寄せて来て、そしてすぐ崩れて行つた。

一日毎に寒くなつて行つた。手水鉢の水も薄く氷つて、其處にキラ／＼と朝日の光が當つてゐた。蝶次はお座敷に出る時分に散々着古した色の褪めた蝶々の模様の長襦袢を着て、素足を冷たさうに厠から出て来て、柄杓でその薄い氷を砕いて手を洗つた。

「お、寒い！」

かう言つて、急いで八疊の間に入つて、暖かい蒲團の中に再び冷えた體を入れた。波の音は朝の空氣の加減で、遠く聞えたり近く聞えたりした。風が寒く松を鳴してゐる朝もあつた。

障子の硝子を透して、やがて朝日がさし込んで来た。その光線が、寝てゐる蝶次の夜着の襟常のあたりに来る時分——ぼつと赤味を帯びた蝶々の兩方の頬が冷めたい朝の房の中に際立つて見えてゐる時分には、六疊の眞中の柱にかけた時計が、八時を打つて一時間ほど前に起きて雨戸を明けて、勝手元に行つて、竈の下に火を焚きつけた母親が、手拭を被つたまゝ、十納に焚落しを入れて入つて来て、其處にある角火鉢にそれを明けた。

「今朝はひどい霜だよ。此處等にはめづらしいツて、大家さんの上さんも言つてたよ……。寝てお出、寝てお出！」

など、聲をかけて行つた。

やがて味噌汁の匂ひが、朝の食欲を誘ふやうに、四疊半から此方へと臭つて来た。それと同時に、母親は沸した牛乳をコップに入れて、蝶次の枕元に持つて来て置いて行つた。何うかすると、其頃軽い咳嗽が出て止まらないので、母親は用事の手をとめて、長い間着中をさすつて遣つたりすることなどもあつた。四疊半に入ると、長火鉢に味噌汁の鍋がかゝつてゐて、湯氣が朝日の光の満ちた室の中に白く高く颯つてゐた。

蝶次は大抵牛乳を飲むとそのまゝ起きて来て、長襦袢の上に銘仙の不斷着を引かけて、草履を穿いて勝手元に出かけて行つて、そこで大きな金盥に湯を汲んで顔を洗つた。東京にゐる頃のやうに、長い間鏡臺の前に坐つてゐることはもうないが——氣力がなくなつて、ぢき勞

れて了ふのが例であるが、それでも蝶次は髪を自分で束ねて、髪を鬘かきで何遍となく搔いて  
そして白粉下を塗つて、薄く白粉をつけた。

「何うして、まア、あんなに綺麗だらう！」

常に見馴れてゐる母親でさへさう思つて見とれてゐるやうなことも度々あつた。  
おつくりが餘り長いと、

「お前すぐ、體に觸るよ。」

かういつも母親が言つた。しかし氣に入るまでは、蝶次は何遍となく髪や鬘をかいてゐた。  
思ふやうにならない時には、癩癩が立つと言はぬばかりに眼をつしる上げて、毛筋や鬘かきを  
放り出したりなどした。

「お前のおつくりは本當に怖いよ。」

母親は娘の顔を見い／＼こんなことを言つた。でも、時には——機嫌の好い氣分の好い時に

は、朝飯がすんだ後で、母親と向ひ合つて坐つて、東京にゐた時分の話などをした。十二月も  
半を過ぎて、正月がもう眼の前に近づいて來てゐた。

「東京はもう賑かだらうね。今日は深川の市だよ。お前、あつちにをれば、不動さまにもお参  
りに行くんだがね……」

母親は少し考へて、

「去年は今時分は、お茶屋へのつかひ物の心配や何かで大變だつたね、お前……。此處では暮  
が來ても正月が來ても何にもないんだからね。」

### 九十七

年の暮から正月にかけては、晴れた暖かい好い日が續いた。海を隔てた高い山の嶺には雪が  
白く積つて、それが光線の加減によつて、時には金屬のやうに輝いたり、時には灰色が、つて



暗い色になつて次第に暮れて行つたりした。病院へ行く表の方の坂路からは、一刷毛に撫でたやうな松林と、廣い碧い海とを前にして、それがひろくと唯一目に見渡された。

それでも餅を搗く音は處々に聞えた。それに都に近い此處等の村では、もう舊曆の正月などをするものはなかつた。夜、珊瑚樹の垣の傍を母親が通つて行くと、奥の茅葺の家の庭から、提灯の光や土竈の火などが見えて、子供や大人の騒ぐ聲に交つて、餅をつく音が靜かに聞えてゐた。押繪の羽子板や武者繪の凧などを買つて、停車場から此方に歩いて來る百姓の爺などもをりく選返した。

いくらこんなところにかうして住んでゐても、お飾りだけはしなければならぬと言つて、母親は大家の上さんに聞いて、それを買ひに出かけて行つたが、歸つて來ると、風呂敷を其處に投り出して、

「お前、それは本當に可笑しいやうだよ……。いゝえ、停車場までは行かないんだよ。ちぎ、

其處を眞直に向うに行くと、百姓家が五六軒あつて、其處を通り越すと、町家が少しの間つゞいてゐて、そこで法連だの燈たのを賣つてゐるんだよ。それもね、お前、小さな店で、一軒きり賣つてないんだよ……。松なんか賣つてやしないよ。松はいくらもそこいらにありますからなんて笑つて言つてゐたよ。のんきなもんだね、お前。」

さもめづらしさうに母親は娘に話した。

餅は大家さんに頼んで、一緒について貰つた。其日は、朝から餅を搗く音がしてゐたが、午頃になると、其處の娘が、つき立ての餅を小さなお鉢に入れて、

「これを召上つて下さい。」  
と言つて置いて行つた。

「まア、久し振りでつき立てのちぎつた餅が食べられる。」

田舎に五六年もゐた母親は、かう言つて、それを甘いくお汁粉にした。

それでも、何處の家にも、入口には小さな松が釘づけにされて、注連がヒラ／＼と風に靡いてゐた。病院の表門には、大きな松が竹と一緒に立てられたが、元日には、交叉した國旗が松の緑葉の間に遠くから見えてゐた。讚美歌の合唱が、風の具合で、微かに蝶次の枕元までも聞えて來た。

九十八

「あの子達の父さんは亡くなつたんだツてね。」

母親はある日かう蝶次に話しかけた。

「あの子ツて？」

「そら、此間、お前が話してゐた可愛い子供さー！」

「病院の裏門の處でよく逢ふ？」

「あゝ、さう……」

かう言つて、

「此間もお父さんが治つて、早く東京に歸りたいでせうツて言つたら、姉さんの方がこつくりさんをしたがね、可哀相だね。」

「さう……何時なの？」

「昨日だツて……」

「可哀相ねえ……」

蝶次はその幼ない姉弟を歴々と頭に浮べて居た。藥を自分で貰ひに行く時に、蝶次はよくその幼ない姉弟に裏門のところまで逢つた。姉は十歳位で、お下けに白いリボンをかけて、流行のマントなどを着てゐた。丸顔の、色白の、髪の毛の濃い子であつた。弟は、活潑な伶俐さうな、眉と眼色の可愛い子で、久留米緋の羽織に長い白い紐などをつけてゐた。二人はいつも悪戯を

しながら、裏門から運動場の方へと歩いて行つた。姉の方が重箱を風呂敷に包んだのを抱へて居ることもあれば、弟の方が一人でさびしさうにして歩いて行くことなどもあつた。それはあつた暖かい春のやうな日であつた。薬壺を下けて蝶次が歸つて來ると、向うからその弟の方がいつもの様に一人でさびしさうにして歩いて來た。蝶次は度々逢つて、顔馴染になつてゐるので、殊に其日は何うしてか此方を見て何か言ひたさうな風をしてゐるので、

「何處へ行らつしやるの？」

かう蝶次は聲を懸けた。と、男の兒はきまりがわるさうに、黙つて、立留つて、前に來る綺麗なおばさんを見た。

「今日はお一人ね。」

かう言つて、蝶次はその男の兒の傍に寄つて、

「いつも一緒に入らつしやるのは、貴方の姉さんね？……」

男の兒はかう聞かれて可愛らしく小さく黙頭いて見せた。

「病院にゐるのは、父さん？ 母さん？……父さんなの？ さうなの？ よくお見舞にゐらつしやるのねえ……姉さんは何故今日は一緒に入らつしやらないの？……先に貴方を置いて行つて了つたの？……さう——」

かう言つて、蝶次は頭をやさしく撫で、

「おばさんの家にも遊びに入らつしやい。そら向うに、松の中に、お家が一軒見えるでせう。

あれがおばさんの家よ。」

かう言ふと、可愛らしく黙頭いて、そしてお辭儀をして、一散に病室の方へと駆けて行つた……。それから蝶次は度々彼方此方で、その姉弟に逢つた。折よく持つてゐた菓子遣つたことなどもあれば、その姉弟の母さんらしい三十五六の品の好い束髪そくはつの細君さいくんを陰ながら見たこともある。その父さんと言ふ人は、病院の西の角の一等室とうしつにゐて、學問がくもんの出來る名高い人だとい

ふことも段々聞いて知るやうになつた——。

「病院で亡くなつたの？」

「さうらしい……今朝、家へ引取つて来たツて言ふから。」

「可哀相ね——」

その姉弟のさびしさうな姿を思出して蝶次は聲を曇らせた。

### 九十九

畠を越して松林の向うに見えるその幼ない姉弟の家には、その日、東京から大勢の弔ひ客が集つて来た。停車場からの路には、今までにもついぞ見たことのないやうに賑かに腕車が通つて、高帽を冠つた紳士だの、黒襟紋附の貴婦人だの、ステッキを抱へた新聞記者らしい男だのが、畠の角で腕車を下りて、そして忙しさうにその松林の中に入つて行つた。麻髪に結つたハ

イカラな女學生などもその中に交つてゐた。

「大變なくやみの人ね。」

十時頃外から入つて来た母親は、かう蝶次に向つて言つた。

「お前もちよつと出て御覽よ。車が十臺、十五臺、續いてゐるから……。餘程、豪い人だつたと見えるよ。」

「あの子供達は何してゐるだらうね？」

「さつき、弟の兄の方が洋服を着た男の人に連れられて、病院の方に行つたのを見たよ。」

「可哀相ね……」

蝶次は出て見やうともしなかつた。何となく胸が塞るやうな氣がして、種々のことが心の中を行つたり來たりした。

「さうですつてね、今夜、焼場で骨にして、明日東京に持つて歸つて、お葬式をするんですッ